

# 教育におけるテクノロジーの研究と質的研究方法論

\*大 谷 尚

## 序

1. 高校時代までの教育への問題意識
2. 学部学生時代の教育学に対する思いと恩師との出会い
3. 大学院学生時代の研究指導
4. 長崎大学時代の経験
5. 名古屋大学時代
6. 帰国後の質的研究方法論の研究への取り組み
7. 以上の経験の相互の影響
8. 結語：研究領域を超えた世界共通の研究言語としての質的研究

一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧するとき、そう信ぜざるをえない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に、限りなく慰めに充ちている。君はこのことをどう考えるだろうか。

森有正『バビロンの流れのほとりにて』より

## 序

本稿で筆者は、現在までに至る研究の経緯を記そうと思う。むろんそれは、これから研究を志す若い人々の役に立つだろうなどと大それたことを企図してのことではない。むしろそれは、筆者自身の来し方を省察するためであり、さらにそのことを通して、筆者自身の行く末について、少しでも考えるきっかけを得るために、この機会を利用して頂こうという企みのためである。

### 1. 高校時代までの教育への問題意識

一般に、ひとりの研究者の研究的関心の発端は、いったいいつまで遡るべきだろうか。冒頭のエピソードに倣って考えるなら、それはその人の幼い日にまで辿ることができるのかもしれない。筆者にもその感覚

はたしかにある。筆者は小学校の時代から、学校や教育のさまざまなことに疑問や矛盾を感じていた。「これはおかしい！ このことは絶対に大人になるまで覚えておくんだ！」そう、何度も何度も思った記憶がある。実際には、そのひとつひとつについては、それが何だったのか、ほんのいくつかを除いて、すべて忘れてしまっている。しかし、そのように何度も強く思ったということと、その時の気持ちだけは、今だに忘れていない。しかしながら、ここでは一挙に歩を進めて、高校時代に移ることにする。

筆者は横浜市にある新設の私立高校に5期生として入学した。この学校には、当時いくつもの問題があった。新設校ゆえか、大変に多くの生徒を入学させており、1年次の筆者の学級には56人もいた。この学校はクラスルームは3年間変わらないが、筆者の学級では卒業までに10名が退学し、他の学級も同様であった。また、能力別のクラスで授業をしていたため、所属学級「クラスルーム」と、授業を受ける「レッスンルー

\* 名古屋大学大学院教員

ム」とが異なっていた。レッスンルームはさらに、文系の授業（英語、国語、日本史、世界史など）と理系の授業（数学、物理、科学、生物、地学など）とでは違っていた。そのため、1時間ごとに生徒のほぼ全員が教室移動をしていた。またレッスンルームは、定期試験の成績に基づくので、定期試験の度に変わっていた。筆者はそのような環境にしながら、そこで過ごす生徒たちを見ていた。上位のクラスに上がろうとがんばる生徒、クラスが下がって意欲と誇りを失ってしまった生徒。また、いちばん下のクラスにいて、上昇する気はないが、自分なりの生きるエネルギーを豊かに有している生徒たちも見ていた。

この学校には修学旅行のようなものはなく、「団体訓練」という旅行・宿泊行事があった。しかも生徒指導部長だったのは海軍兵学校卒業の元職業軍人で、軍隊の時の原理をそのまま教育に持ち込んでいた。たとえば常に、旧日本海軍の「5分前精神」が求められた。しかし5分前に点呼を取るのだから、結局、物理的な集合時刻が5分早まっただけで、「精神」などにはなっておらず<sup>1</sup>、筆者はそのようなことに大きな矛盾を感じていた。

なお、この学校には小学校もあり、その中のひとつの教室に、レスポンス・アナライザーが設置されていた。しかしそれはまったく使われておらず、高額な費用をかけて導入したものがなぜ使われないのだろうかという疑問を感じたことを覚えている。

高校時代には、これ以外にも教育に関してさまざまな経験をする。それらを通して、大学で教育学を専攻したいと考えるようになった。しかし、高校で非常勤講師としてお世話になった和田守先生（後の大東文化大学学長）にこのことを話すと、「君は教育学をやりたいのか、教育について考えたいのか、どちらですか?」と聞かれた。それで、「その2つは違うのですか?」と聞いたら、「違うのです。もし教育学をやりたいのではなく、教育について考えたいのなら、教育学科へは行かない方が良い」と言われた。しかし当時の筆者にはこの意味がわからず、結局、当初の考えどおり、教育学部教育学科に進学することになる。

なお、後のことがらと関係があると思われる、学校以外の高校生時代の経験をひとつだけ書いておく。筆者は高校時代から物理学が好きで、高校、大学を通じて講談社のブルーボックスなどを良く読んでいた。その中には、常識的な認識を超えなければ理解できない量子力学なども含まれていた。たとえば量子力学では、素粒子がどこにあるかは確率としてしか与えられず、観測した瞬間にその位置が決まるとされる。それ

は、日常生活の体験とは全く異なり、受け入れるのに困難を伴うが、そのような領域にも関心を持っていた。これについては後述する。

## 2. 学部学生時代の教育学に対する思いと恩師との出会い

大学に入学してすぐに、上記の和田守先生のことばの意味がわかった。たとえば、1年の時の教育哲学の授業で、大浦猛先生（後の山梨県立短期大学長）が、「…と申しましては教育の現場にいる人たちを鼓舞することになりませんので、…と考えます」とおっしゃった。私はこれに反発し、「教育学というのは、教師を鼓舞するためにあるのですか?」と授業後に大浦先生に強く質問した。大浦先生は、「弁当を食べなければなりませんので、研究室に来て下さい」とおっしゃり、お弁当を食べながら、真ん前であれこれという筆者の話を聴いて下さった。後で人にきくと、大浦先生は、お怒りになると、その弁当箱をパンパンと叩いて話すとのことだった。しかし筆者には、終止静かに対応して下さい。しかしながら、それでもとにかく、満足のいく答えは得られなかった。

そういうこともあってか、学部時代はオーケストラばかりやっていた。大学にいくと部室に直行し、そこで楽器を弾いていた。学部卒業時に大学から受けたのは学士号だが、実質的には楽士号だったと感ずるほどである。

それでも、学部時代に、現在の研究につながるいくつかの出会いがあった。

まず大学1年の夏期休暇に本を1冊読んでレポートする課題が出た際に選んだのが、講談社のブルーボックス「教育工学入門—プログラム教育とティーチング・マシン（1969年）」だった。これはまったく面白く感じなかった。しかしその後、沼野一男『教育工学』（沼野、1971）を読んだとき、その具体的な内容に関心を持ち、同時にいくつもの疑問を感じて、この著者に会ってそれらの点を問い詰めたいと考えた。その沼野先生は非常勤講師として授業に来られることになった。筆者の大学は、集中講義以外でも、非常勤講師の授業は大学院・学部共通だったため、非常勤講師の授業の方が内容が充実していた。筆者は、沼野先生にいくつも反論をしてやろうと、待ち構えてこの授業に臨んだが、実際に授業を受けてみると、不思議にそれらは解消してしまい、新たなことをたくさん学んだ。そのため、本を読んだだけの時の疑問や反発とはそういうものなのか、と感じたことを覚えている。教育工学では、同じく非常勤講師の慶応大学工学部長をなさつ

た藤田廣一先生の授業にも出た。これも大変おもしろかった。

そして小野慶太郎先生に出会う。学部3年の終わりだったか、教育学科の全教員を前にして、学生が順番に行く、卒論仮題目発表のようなものがあった。音楽ばかりやっていた筆者は、卒業論文に斉藤秀雄の「指揮法教程」(斉藤, 1956)を取り上げるつもりだった。筆者の順番になって入室し、それを発表して先生方のいくつかの質問に答えて退室した。すると筆者が授業を受けたこともない小野慶太郎先生が、筆者の資料を持って部屋を抜け出してきて、卒論の構想について、これはどういうことか?と聞いて下さった。それがきっかけとなって、小野先生の指導で卒論を書くことになり、大学院でも指導を受けることになる。

### 3. 大学院学生時代の研究指導

大学院とはこんなに面白いものだったのか。これは筆者が大学院に入ったときの印象である。小野慶太郎先生は、「誰でも、ゼミというものは教員1人に1つあるべきものと考えているだろうが、そうではない。学生1人に1つずつあるべきものだ」とおっしゃって、もう1人の指導生のゼミはジョン・デューイ、筆者のゼミはマルティン・ハイデッガーだった。ハイデッガーは *Sein und Zeit* (存在と時間) を原書で読んだが、筆者のゼミだから、毎回筆者が担当する。ハイデッガーには、ラテン語やギリシャ語の文献も原語で引用されているが、たとえばトマス・アクィナスがラテン語で引用されていると、筆者は、無謀にもなんとか訳そうと、ラテン語の立派な辞書を借りてくる。ラテン語は後にほんの少しだけ学んだが、動詞が激しく変化する上、名詞さえ格変化する。したがって文法が分からなければ辞書さえ使えないのだから、訳せるはずもなく、結局はその辞書を持ってゼミに行く。そうすると、小野先生から「それは君の辞書かね?」と聞かれる。それで、「いいえ違います。図書館で借りました。」と答える。すると、「それは良い辞書だから、一冊持っておきなさい(購入しておきなさい)。ところで訳せたかね?」と言われる。それで、「いいえ訳せませんでした。」と答える。すると、「では私が訳してみる、まあ私のラテン語などいい加減だが、聞いておきなさい。」と言って、辞書もなく、その原文を読んで訳してしまう。全く同じことがギリシャ語でもあり、アリストテレスがギリシャ語で引用されていると、筆者はギリシャ語の辞書を借りてなんとか訳そうとする。そもそもギリシャ文字さえ読めないのだから、そんなことは不可能だと分かっているのだが、若いためか、何

かほんの少しでも分かることがあるのではないかと試みる。しかし当然、何も分からず、その辞書を持ってゼミに行く。すると、「それは君の辞書かね?」「いいえ違います。図書館で借りました。」「それは良い辞書だから、一冊持っておきなさい。それで訳せたかね?」「いいえ訳せませんでした。」「では私が訳してみる、まあ俺のギリシャ語などブロークンだが、聞いておきなさい。」となって、小野先生は、またそれを読んで訳してしまう。小野先生は研究室がお好きでなく、大学を出て、喫茶店でゼミをするのを好んでいた。そして、「私には何でも露骨に質問しなさい。露骨でないとは分からないよ。」と言われるので、「先生は、西洋古典語をいつ勉強なさったのですか?」と質問すると、「大学院生時代に、西洋教育史の梅根悟(さとし)先生のゼミ生たちを中心として、夏休みにラテン語やギリシャ語を学ぶ自主ゼミのようなものがあったが、自分は禅に行くのでそれに参加できなかったため、ひとりで勉強したのだ。だから自分のはいいい加減なのだ。」とおっしゃった。しかしきくと、皆と一緒にやれば、これくらいでいいだろうと、ある程度で切り上げてやめてしまうのに、1人でやったために、読めるようになるまで勉強してしまったのだと思った。なおその時、「しかし君は慌てることは無い」と言われた。それがどういう意味なのか、よく分からなかったが、それから20年ほどして、自分もラテン語をわずかだが学ぶことになる<sup>2</sup>。なお、このハイデッガーのゼミこそ、一生の内でもこれほど熱心にやったものはないのではないかと思うほど、筆者はこれに集中した。

小野先生は、臨済宗平林寺に参禅し、第22世白水敬山老師、第23世糸原圓應老師に師事され、大悟して印可されたと聞かすが、そのゼミはまさに禅問答のようであった。あるとき、ハイデッガーを訳していると、「これは、『…である』という意味だね?」とおっしゃる。先生は肯定文であることを強調したかったのではなく、内容をおっしゃったのだが、筆者は、「先生、この文には *nicht* がありますから、これは否定文で、『…ではない』という意味だと思います」と答えた。すると小野先生はじつに不思議そうな顔をして、「何何であるということと、何何でないということとの間に、どれほどの違いがあるのか?『柳は緑、花は紅(くれない)<sup>3</sup>』』ということとは、『柳は緑ならず、花は紅ならず』ということと同じではないのか?」とおっしゃる。筆者にとっては、こういうことがじつに面白かった。上記のような「大学院とはこんなに面白いものだったのか」という印象は、このような様々な体験のためである。また、面白いだけでなく、これらのことを通して、

形式論理にとらわれない、弁証法的な論理というものを教わった。これは後に、社会的構成主義や相互行為論など、同じく形式論理にとらわれない社会科学の新しいパラダイムを受け入れる際に、多に有益だったと考えている。

博士課程中間論文（一般の修士論文に相当する）では、ベスタロッチの直観を扱った。修論提出の締め切りは1月であったが、小野先生は、書いておけと言って、禪に行ってしまう。その禪とは、臘八接心というもので、釈迦の成道を記念して、陰暦12月1日から8日朝まで行われ、書物には、昼夜寝ずに座禅し、庭の樹の下や岩の上で座ったりもするほど大変厳しいものだとある。小野先生は、「この年になると遺書を書いて行くのだよ」と言う。小野先生は、通常の指導教員がするような指導、たとえば先行研究を読めというような指導は一切なさらなかった。しかし、（小野先生がそうおっしゃった訳ではないが）その遺書には、自分たち大学院の指導生のことも書いて下さっているのだらうと思うと、自分たちのことを遺書に書いてご自分の修行に出かけていくことを超える研究指導などあるだろうか、と深く感じて修論に取り組んだ。修論の後には、筆者のゼミは、ハイデッガーの Sein und Zeit から、ヘーゲルの Phänomenologie des Geistes（「精神現象学」）へと移る予定だった。

しかし大学院3年目の後期から、筑波大学学術情報処理センターに草鞋を脱いで、中山和彦教授の下で、大型計算機を科学技術計算用コンピュータ言語である FORTRAN で使うことを学んだ。このセンターは学術情報データベースのセンターでもあり、そのデータベースを用いた計量書誌学 bibliometrics の研究も行い、後述の長崎大学着任後もしばらくこれを継続して論文にまとめた（大谷，1980）。また、中山和彦教授を中心にこのセンターが力を入れていた、小学校でのクラスルーム CAI の研究のための作業にも、少しだが参加させて頂いた。その後、長崎大学に赴任する。

## 4. 長崎大学時代の経験

### (1) 着任直後

筆者が助手として採用された長崎大学教育学部附属教育工学センターには、TOSBAC40というミニコン<sup>4</sup>が3台あった。これには16進数で入力するキースイッチ、紙テープ入力装置、カードリーダー、磁気ディスク装置、ラインプリンタなどの周辺装置があり、それらを使った。また、カードをパンチするためのカードパンチ機があった。

この頃からじょじょにパソコンが実用化され、それ

ら<sup>5</sup>を使ってさまざまな教材開発などを行った（大谷，1982a）。また、音楽科の研究の支援を行い、音楽科の教員に使いやすい、パソコン本体、キーボード、ディスプレイ、プリンタまでが一体となった Oki if800 というパソコンを用い、プログラムを筆者が書いて、音楽科の教師のための読譜指導の評価システムを開発した（大谷，1982b，1984a，古田・大谷，1985）。さらに、就職当初から、本学教育方法講座出身の八田昭平教授の下で、附属学校での授業を継続的に観察していたが、NEC N5200という、漢字が使え、しかも熟語で入力できる、当時としては希な機能を有したオフィス・コンピュータ系のパソコンを用いて、授業逐語記録を入力し、プログラムを書いてそれを分析する研究を開始した。振り返れば、このことには、上記の計量書誌学の経験が背景になっていたと考えることができる。ちなみに、筆者のこの仕事は他大学の研究者からも評価され、その大学では、筆者の開発したプログラムを使って授業研究を行うために、全く同じコンピュータを導入し、筆者から提供されたプログラムを使って研究を行った。

ところで筆者のこのセンターには、教員や教員に指示された学生から、統計処理についての相談がしばしば寄せられた。そのほとんどが、「卒業論文のために採ったデータを処理したが検定をしていない。卒論発表会の記録を読むと、指導教員以外の先生から「検定はしたのか？」という質問が出るのが分かったため、検定をしたいので教えて欲しい。」というようなものであった。筆者は学部、大学院を通じて統計学は履修していなかったが、当時その大学の教養部に所属していた統計学の寺崎康博先生に指導を受けながら推測統計学を勉強し、それに対応した<sup>6</sup>。この時に、統計の世界の一端を初めて覗いた。

なお、附属学校での教育実習生の授業を観察しビデオに録画する過程で、筆者にはきわめて問題だと考えられる授業と実習生指導とが行われているのを目の当たりにする。それは筆者が小学校時代に感じた、学校教育に対する理不尽さがフラッシュバックしてくるようなものであった。筆者はそれについて「虚構の教材に関する一考察—虚構の録音機材をめぐる—」（大谷，1984b）という論文にまとめて学部紀要に発表した。これについては後に再度触れる。

### (2) NIGHT システムとその残滓の撤去の経験

ところで長崎大学の教育工学センターは、筆者の赴任以前には、「NIGHT システム」という教育工学の大きなプロジェクトを実施していることで有名であった。上記のミニコンも、当時長崎大学にあったどのコ

ンピュータより高性能であって、そのため大学の教職員の給与計算もそれで行っていたほどである。

NIGHT システムとは、教室に設置されたレスポンス・アナライザー（児童・生徒の回答の選択を挙手などでさせるのではなく、ひとりひとりの机に設置されたスイッチでさせ、その全体状況を教師が把握したり、それを児童・生徒に見せて考えさせたりする装置）を使うように授業を計画し、そこで収集したデータ（「学習反応データ」と呼ばれていた）を、教育工学センターのコンピュータで分析し、その結果をまた学校に返すというもので、長崎と離島とを結んでおこなわれていた。NIGHT とは Nagasaki 長崎, Iki 壱岐, Goto 五島, Hirado 平戸, Tsushima 対馬の頭文字である。これは科研費による大きなプロジェクトだったが、文部省も力を入れて行われたため、離島との間では県の行政無線を夜間に使ってデータの送受信を行っていた。

筆者はこのプロジェクトの終了後に着任したため、このプロジェクトのために学校に設置された機器を撤去しに行くことがあった。学校の教室に設置されたレスポンス・アナライザーは、教卓に親機が設置され、そこから児童・生徒の机の上の子機（選択のできるスイッチ）へとケーブルが張り巡らされていた。それをすべて撤去するのは、あたかも、建物の外壁などに繁殖していたが今は枯れてしまったツタを、すべてきれいに剥がす作業のようであった。ケーブルを留めていた金具の跡が、撤去後にあちこちに残ってしまう点も、ツタの気根の跡が外壁に残ってしまうのと良く似ており、そのようなアナロジーを感じながら作業をした。ようするに、以前にはここで生きていた何かは、今は既に死んでいて、それを剥がして捨てる作業に従事しているような気持ちになっていた。そして、巨額の予算をかけ、多くの人たちを巻き込んだこのような大きなプロジェクトが、そのように姿を消してしまい、金具の傷跡のようなもの以外、何も残らないということに疑問を感じたが、それをどう考えればいいのか、当時は明確には分からなかった。

### （３）教育工学に対する疑問

教育工学では、これほど大規模なプロジェクトではなくても、同様の結果に触れることが多かった。それはまた、高校時代に小学校の教室で見た、全く使われていないレスポンス・アナライザーの姿と重なった。そして、それは、そのプロジェクトやその導入が、requirement pull (needs pull) によるものではなく、technology push (seeds push) によるものだったからであると考えられるようになる。

また、当時の教育工学では、工学主義的なロジック

が当然のように語られていたが、筆者はそれに対しても深い疑念を持っていた。それはたとえば、「プログラム学習の教材は開発するのに大変な時間がかかるが、できた教材を多くの学校で交換し、共有して使うことで、開発にかかった時間はその学校数で割った時間だと考えることができる（通常の10倍の時間をかけて開発した教材でも、10校で共有して使えば10倍÷10校＝1となり、通常の教材開発と同じ時間で出来たことになる）」や、「コンピュータの教育利用は教師と子どもとの間にテクノロジーを介在させるので人間的な教育ができなくなるという指摘があるが、そうではなく、教師はコンピュータの利用によって浮いた時間を子どもとの接触に使うことができるのだから、人間的な教育が実現できる」などの言説が、まことしやかに流布されていた。しかし前者については、日本の学校の教師の授業はすぐれて個性的であって、教材の交換や共有は〈じっさいには〉普及しなかった。後者については、コンピュータを導入した学校の教師で、以前より時間が自由になった教師など、〈じっさいには〉1人もいなかった。そもそもそれ以前に、ガリ版（謄写版）でプリントを作っていた時代とコピー機が導入された時代とを比べても、後者の方が教師に自由な時間ができたなどということは、全くなかった。そこで筆者はこれらを「教育工学における『捕らぬ狸の皮算用』理論（工学主義的誤謬 engineering-ist fallacy）」と呼んでいたが、このようなことに触れるにつけ、この〈じっさい〉を観察することと、その際にそこで〈じっさい〉を覆ってしまうような、支配的な言説やその背景としての文化を、批判的に検討していくことの重要性を痛感していた。しかし筆者には、それをどのように実現すれば良いのか、その時はまだ分かっていなかった。

### （４）カナダからの2人の研究者との出会い

筆者の長崎大学勤務の最後の年に、国際交流基金とカナダ社会科学・人文学研究機構（SSHRC）の助成によって東京工業大学教育工学開発センター<sup>7</sup>に1年間滞在していたカナダの2人の研究者、John Brine 氏<sup>8</sup>と E. Marica Johnson 氏<sup>9</sup>が帰国するにあたって、日本の大学の教育工学関係のセンターのいくつかを訪問することになり、筆者の長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター（教育工学センターから改組・拡充していた）にも来ることになった。筆者は事前のやりとりで両氏の希望を聴いて計画を立て、まず、両氏を附属中学校に案内して一緒に授業を観察するとともに、生徒と交流する機会を設け、その後、日本のコンピュータ利用教育について筆者と懇談を行った後で、筆者の自宅に夕食に招待する予定だった。その懇談で

は、筆者が何に関心があり、どのような研究をしたいと考えているかを話し始めた。しかし附属学校訪問に時間がかかり、夕食の時間を考えると、懇談の時間はかなり少なくなっていた。そこでまず要点を話し、「話したいことはまだまだたくさんあるのだけれど」と言うと、全く予期しなかったことに両氏が「これ以降は、あなたが何を言おうとしているか、言わなくても自分たちにはすべて分かる。そして、そのようなことを言う日本の研究者には、日本に1年間滞在して、初めて出会った。帰国前にあなたに会えて本当に良かった。」と言われた。そして「自分たちは、あなたの研究に有益な情報を提供できると思う。」とも言われた。

この両氏が帰国するとき、筆者あてに3つの物が送られてきた、そのうち2つはBrine氏の博士論文(Brine, 1988)とJohnson氏の博士論文(Johnson, 1987)であった。そしてもう1つは、トロント大学での両氏の指導教員であるRonald G. Ragsdale教授によるコンピュータの教育利用に関する著書、『Permissible Computing in Education: Values, Assumptions, and Needs』(Ragsdale, 1988)であった。そのとき、2人の博士論文には筆者の必要とするような文献がたくさん引用されているから役立つと欲しいとのことだった。いっぽうRagsdale教授の本については、2人は何も言及せず、だまって送ってきたのだと記憶している。しかしこの本は、コンピュータの教育利用に関する本としては、それまで筆者が見ていたものとは全く異なるものだった。

コンピュータの教育利用に関する当時の北米の本には、具体的なシステムやその利用の効果などが、図や写真や表やグラフで紹介されていた。しかしこの本には、そのようなものはひとつも無く、すべて文章だけだった。つまりこの本は、純粹に、コンピュータの教育利用に関する論考から成っていた。

またこの書の第1章は、書名の主部である「Permissible Computing」と題されていて、冒頭にエビグラフとして、新約聖書「コリントの信徒への手紙」10章23節から次の2文が引用されていた。

“Everything is permissible.” – but not everything is beneficial.

“Everything is permissible.” – but not everything is constructive.

「コリントの信徒への手紙」とは、キリストの弟子パウロが、コリント（現在のコリントス。ギリシア共和国ペロポネソス地方にある都市で、ギリシャ時代は都

市国家）で布教したあと、コリントの教会共同体が分裂していると知らされたため、信仰による一致を望んで書いた手紙であり、とくにこの部分は、コリントから、これはして良いのか、あれはして良いのかという疑問が寄せられたことに答える部分である。この箇所は、「新共同訳聖書」では次のようである。

「すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことが益になるわけではない。

「すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことがわたしたちを造り上げるわけではない。

つまり Permissible Computing とは、「コンピュータは教育にどのように使うこともできる。しかし、どのように使うのが良いのかをこそ考えなければならない」という意味だと理解できる。

コンピュータの教育利用は、教育の効率化や教授・学習過程の最適化のために行うというのが、当時の教育工学の世界の考え方であった<sup>10</sup>。しかし筆者は、このような考え方には納得できなかった。いっぽう、当時の日本の教育学者の中には、コンピュータを理解する人や、ましてそれを使える人はほとんどおらず、教育学的な観点からコンピュータの教育利用について検討する研究者もいなかった。しかしRagsdale教授は、コンピュータの教育利用を効率や教育効果の点から考えるのではなく、むしろその副題にあるように、価値観や必要性の観点から論じようとしているのだと知った。

## 5. 名古屋大学時代

### (1) 着任直後

その後、名古屋大学に移り、新設の教育情報学講座を1人で担当することになった。そこではまず、長崎大学で行った授業記録の分析をまとめた(大谷, 1989)。また、当時はWINDOWS95普及以前だったが、日本製の一体型のパソコンと専用のソフトウェアで学習用プログラムを走らせるシステムが、上記の筑波大学のグループによって開発され、じょじょに教室に導入されはじめ、名古屋の近隣の学校にも導入された。そしてそこでは、後に筆者が観察に通うことになるN小学校のK教諭が筆者に語ったように、「コンピュータを導入した教室では、これまで起きていなかった、ありとあらゆることが起き」始めていた(大谷, 1996c)。一例だが、一斉授業とは異なり、子ども一人一人がコンピュータに向かう授業では、教師のコントロールを離れた子どもどうしの自発的な教え合い

などが起きており、子ども同士の関係性や子どもと教師との関係性などの、教室の social structure が変わりつつあることを筆者は感じていた。それで、そのことを正面から研究したいと考えるようになった。

そもそも、教室にそのようなものが入って来ると、教室にわずかでも反応が起きる。その多くは異物に対する生体の拒絶反応のようなものであり、急性拒絶反応もあるが慢性拒絶反応もある。したがって、それを詳細に観察し分析することで、潜在的な教室文化、教師文化、教授・学習文化、学校文化を検討することができる。つまり筆者は、教室のテクノロジーを、潜在的な学校文化を「写し出す鏡」あるいは「照らし出す光」と捉えようとしたのである。

ところで当時、授業研究には大きく2つの潮流があった。1つは教育方法学的なアプローチであり、授業逐語記録を作成し、それを詳細に分析するもの<sup>11</sup>であって、まさに名大の教育方法講座が開始した方法である。もう1つは教育学でなされていたアプローチであり、教授行動や学習行動をカテゴリー化して、一定時間ごと（たとえば3秒ごと）に観察・記録して分析するカテゴリー分析であった。

しかしながら、コンピュータに向かって学ぶ授業では、教師の発話も子どもの発話もほとんどなく逐語記録が作成できないため、前者のアプローチは採用できなかった。また、教師による板書や発問や指示などの教授行動のパラエティがほとんど無いため、後者のアプローチも採用できなかった。

## (2) トロント大学へ

それでもそのようなことをなんとか研究的に扱う方法がないものかと探していた。そして、当時オレゴン大学にいた C.A.Bowers 教授が、コンピュータの教育利用に対して批判的な論考を行っている (Bowers, 1988) ことを知った。しかしその論考は、観察やインタビューに基づくものではなく、あくまで理論的なものであったし、Bowers 教授自身はコンピュータが使えるわけではなく<sup>12</sup>、かつ学校での授業の観察もしていなかった。それに対して上記のトロント大学の Ragsdale 教授は、コンピュータに詳しい上、学校に頻繁に出かけて行って、コンピュータを使った教育実践を観察し、教師たちにインタビューし、それらを記録として作成して研究している classroom researcher であることが分かってきた。

またこの頃、「質的研究」というものがあるということを知った。それは、観察による観察記録やインタビューによるインタビュー記録という「データ」を作成して、それをなんらかの定式的な手法で分析するも

のらしいと分かってきた。そして、まさにコンピュータの教育利用を対象に質的研究を行っているのが、上記の Ragsdale 教授のグループなのだということもあらためて分かってきた。それで、国際交流基金の「学者等長期派遣」という助成金を頂き、トロント大学オンタリオ教育研究大学院 OISE (Ontario Institute for Studies in Education) の測定・評価・コンピュータ利用学科 MECA (Department of Measurement, Evaluation, and Computer Applications) に1年間滞在し、Ragsdale 教授の下でコンピュータの教育利用に関する研究を行うことになった<sup>13</sup>。そのようにして滞在したトロント大学では、Ragsdale 教授のグループと一緒に授業を観察に行き、記録を作成し、それにコードを付け、それを協同で分析した<sup>14</sup>。また、トロントでは、日本の教育を1年間、「外から見る」経験をすることができた。それに加えて、北米の大学院での研究者養成のあり方も、間近に見ることができた。

## (3) 帰国後の質的研究の取り組み

帰国後、トロント大学で学んだ方法を、日本での自分の研究に役立てる努力をした。質的研究には、研究対象となる組織や人々と研究者との関係性が大きく影響するが、北米における研究者と学校との関係性は、日本でのそれとは大きく異なっていた。たとえば日本では、大学から学校を訪問する研究者は、「指導助言者」として扱われるが、トロント大学のチームは、学校にとって、むしろ対等な訪問者という位置づけであった。そのため、トロントで学んだ方法をそのまま日本で適用することはできず、それをいわば「ローカライズ」する必要があった。その際には、研究方法をローカライズするだけではなく、むしろ初等・中等学校の教員と大学教員との関係性を、トロントで経験したそのように変革していく必要を感じ、それにも努めた<sup>15</sup>。

それと同時に筆者が心がけたのは、量的・実証的研究者らとの対話であった。筆者が活動していた日本教育工学会の会員には、教育学者は上記の八田先生など数えるほどしかおらず、ほとんどは工学や理科教育学や心理学をバックグラウンドとする量的・実証的研究者たちであった。それらの人たちに対して、質的研究とはどういうもので、どういう意味や意義があるのかについて説明を行うとともに、それらの人々の疑問に答えなければならなかった。中には非常に攻撃的な人もいた。しかしこの仕事は、筆者にとってやりがいのある仕事であった。むしろ量的・実証的研究者からの疑問に答えるために質的研究について種々検討することは、筆者にとって、質的研究に対する理解を深める

重要な契機となった。さらに、量的研究について筆者自身が学ぶことで、質的研究を相対化することになった。このことは、後述する医療系の研究者や実践者たちへの質的研究の紹介を行う際の、重要な基盤になっていると考えている。

このようにして、カナダからの帰国後、テクノロジーの教育利用に関する質的な研究を開始した(大谷, 1995, 1997a, 1997b, 2006, 2008b, Otani, 2005, 2010)。このうち大谷(2006)は、ハイデッカーの『技術論』を、教育における情報テクノロジーの検討に適用した上で、質的研究の意義と必要性を論じたものである。また大谷(2008b)は、教室と学校のテクノロジーに関する筆者の4つの研究を統合し、テクノロジーと教授・学習文化とのコンフリクトを検討して、それを芥川の小説の題名から「神神の微笑モデル」と名付けたものである。これらの研究を通して、質的研究方法論とその意義の研究も行なって発表し、これを今日まで続けている(大谷, 1999, 2005, 2006, 2007, 2008a, 2008c, 2012, 2013b, 2016a, 2016b, 2017a, 2017b, 2019)。なお、これらの一部は質的研究に関連する科学研究費補助金の援助を受けて行った<sup>16</sup>。

また、1995年から、研究領域を超えた質的研究のメーリングリストを主催し、現在も継続している。そこでの初期の大変活発なさまざまな議論から、質的研究について検討するいくつもの重要な機会を与えられた。

#### (4) 再びトロント大学へ

時間を少し遡るが、2005-2006年に文科省の「海外先進教育実践研究支援プログラム」<sup>17</sup>の援助を受けて、再びトロント大学に1年滞在することができた。この時の研究テーマは、教師教育の大学院プログラム化に関連して、西洋の中世からのSeven Liberal Artsに対してThree Practical Artsと呼ばれる3つの専門職(医師、法曹、司祭・牧師<sup>18</sup>)の大学院での養成プログラムと教師教育の大学院プログラムとが、北米ではどのように展開されているかを調べて検討することであった。前回と同じトロント大学のOISEに滞在したが、このときは、高等教育研究を含む教育理論・政策学科TPS(Department of Theory and Policy Studies in Education)に滞在した。

この滞在にはもう一つの期待があった。それは、その13年前にトロントで学んでその後自分なりに発展させてきた質的研究方法論を、最初にそれを学んだ場所でのその後の発展と突き合わせることだった。たしかに質的研究は北米でもその後多に発展し、広がっていることを確認できた。しかし質的研究方法論そのもの

については、OISEにもあまり詳しい研究者はおらず、みな模索しながら研究している様子を見た。しかし総じて、博士論文のプロポーザルなどのさまざまな機会に、自分がその後学んできたことは間違っていないことを確認できた。また、大変ありがたいことに、そのことは周囲にも評価されていたという感じを持った。そのことの例証の1つは、そのような機会での筆者の発言や指摘を、しばしば、その博士論文の指導教員がメモしていたことであり、また、別の例証として、カナダの学術雑誌の質的研究の投稿論文の査読を依頼されたことなどをあげることができるかもしれない。また、この滞在では、日本にいれば文献でしか触れることのできないような、art-based/art-informed study<sup>19</sup>やperformance ethnography<sup>20</sup>などを含む先進的で多様な質的研究の発展に触れることもできた。

この時の滞在では、長崎時代の知り合いから、当時トロント大学医学部に滞在して医学教育の研究をしていた国立病院機構長崎医療センターの浜田久之医師(現在、長崎大学病院医療教育開発センター長・教授)を紹介され、トロントでの医学教育研究に関する様々な貴重な経験の機会の提供を受けた。浜田氏は博士(医学)を取得していたが、その後、本研究科のEdDプログラムの大学院生となり、博士(教育)を取得する。

なお、その前から引き受けていてなかなか仕上げることはできなかったデンジン・リンカン(2006)の『質的研究ハンドブック第3巻』の編訳の仕事は、この滞在中に完成させた。

## 6. 帰国後の質的研究方法論の研究への取り組み

### (1) 質的データ分析手法 SCAT の開発

ところで、筆者が大学院で担当するゼミでは、当初から、テクノロジーの教育利用を対象として質的なアプローチで研究した書物や論文を深く検討していたが、2回目のトロントからの帰国後から、それをさらに進めて質的研究手法について指導するようになった。そこでは実際のデータの分析も試みた。しかし、あるとき、受講者たちがコーディングを難しく感じていて、どうやったら授業者である筆者のようにコードが付けられるのかを、受講者専用のメーリングリストを立ち上げてかれらだけで論じ合っていることを知ることとなった。そのため、初学者に分かりやすいコーディングと理論化の手法が必要であると感じた。そこで、受講者たちの疑問にヒントを得、筆者が自分どのようにコーディングを行い、それに基づいてどのよ

うに理論化を行っているかを省察的に検討して、それをいくつかのステップに分解し、明示的な手続きとして定式化したものを開発した。それが、質的データ分析手法 SCAT (Steps for Coding and Theorization) である(ただし開発後すぐに SCAT と名付けたわけではない)。この手法の開発の背景には、それまで筆者が質的研究をさまざまな機会に紹介しながらも、実際には質的研究は簡単ではなく、残念ながらそれに向いていない人もいないかもしれないと言わざるを得ないことに、どこか不合理さや矛盾を感じていたこともあったのではないかと考えている。

SCAT はこのように、当初は自分の指導する大学院生のために開発したものであったが、求められて何か所かで紹介すると、それを自分の研究で使いたいという要望が寄せられた。研究で使うということは、その手法の書かれている論文を引用しなければならないため、2008年にそれを論文にした(大谷, 2008a)また、別の機会を得て、2011年にも論文にした(大谷, 2011)<sup>21</sup>。SCAT はその後、開発者が予想しなかったほど多くの研究に利用されることになるが、SCAT には、開発者が開発当初は明示的に考えていなかったような優れた点がいくつかあり、しかもそれが、SCAT が量的・実証的研究者からも肯定的に受け止められる特長であるということも、じょじょに分かってきた。

SCAT については、さまざまな背景の研究機関等から、セミナーとワークショップの開催を依頼されており、とくに近年は医療系からの依頼が圧倒的に多く、タイ、シンガポール、ベトナムなどの外国を含んで百数十回以上を担当してきている。

Kaneko, Aoki, Ohta, Inoue, Modi (2018) は、日本のプライマリ・ケア(地域の医療機関等による初期医療)研究領域における質的研究と、質的・量的の両手法を併用したミックストメソッドリサーチ MMR とを調べて、英国、米国のそれらと比較しているが、日本で一番多く使われているのは SCAT であることを明らかにしている。SCAT が、医学のような、量的な手法が圧倒的に主であった領域で用いられることは、当初は予想もしなかったことであるが、その理由はまず、前述のように、SCAT の分析手続きが明晰で明示的であることと、それが小規模のデータにも適用できることであろうと考えられる。また、SCAT は、解説した論文や分析のフォームをダウンロードできる他、WEB サイトに Tips & Pitfalls を公開するなどして、使用しやすい環境を整えてきている<sup>22</sup>。これらによって、それまで質的研究に着手したくても躊躇していた量的研究者も、これを用いて質的研究に挑戦しはじめている

ものと考えられる。

## (2) 筆者の質的研究の背景としての授業研究者としての観点

なお、最初のカナダからの帰国後くらいから、教育情報学講座の教員であってテクノロジーの教育利用を専門とする筆者は、岡崎市や豊田市などの諸学校から、コンピュータやさまざまなメディアを用いた教育実践についての実践研究の指導助言者としての依頼を受けるようになった。単発的なものもあったが、それぞれの市で3年ほどの期間をかけて研究指定校として行われる教育実践研究に、その開始から最終の発表まで関わることも多くなった。とくに岡崎市では、大変幸運なことに、1つの中学校と2つの小学校に、それぞれ3年間、述べ9年間、関わりを持つ機会を得た。それらの中では、テクノロジーやメディアにはまったく関係のない授業実践の指導助言を求められることもあった。

このようなとき、筆者がつねに心がけたのは、その教育実践の意味や意義を言語化して教師たちに伝えることであった。それは、教師が、その経験的な直観に基づいて、せっかく有意義な実践をしている、その本質的な意義や将来の発展性を言語化することは得意でなく、せっかくの実践の豊かさを自分たち自身でさえ正當に評価できないことが多いと、筆者が強く感じたことによる。つまり筆者は、指導助言者というのは、その学校の教育実践の良いところを、教師に代わって言語化する責任を負うものだと考えるようになった。しかしこのためには、児童・生徒や教師の感情や思考、そしてその教育実践の意味や意義を、授業を見て短時間のうちに言語化して伝えることが必要になる。したがって、このような経験を通して、観察したことを言語化する訓練を自らに課し続けていたのだと考えることもできる。

また、筆者が、データからコーディングする手続きを独学でグラウンデッド・セオリー(グレイザー・ストラウス, 1996)に学び、SCAT の開発前には、自分の研究にグラウンデッド・セオリーと同様の「オープン・コーディング」や「選択的コーディング」などの段階的コーディングの手続きを採用しており、アメリカのフリースクールであるサドベリーバレー・スクールの学校文化に関する論文である大谷尚(2000)でも、グラウンデッド・セオリーのデータ分析手法である「理論的コード化」を行ったと書いているにもかかわらず、グラウンデッド・セオリーのように多くの観察記録や多くのインタビュー記録からコードを抽出してそれをすべて合わせてしまう「非シーケンス分析」

ではなく、ひとつひとつの観察記録や面接記録の単位で分析をする「シークエンス分析」の特性を強く有する SCAT を開発したのも、授業を1つの単位として見て、その流れを把握し、そこで起きていることを、その時間性を含めて質的に分析して言語化してきたためであると考えている。

### (3) 医学研究と医学教育研究における質的研究

以上は、筆者とテクノロジーの教育利用の研究との関わり、そしてそれを通じた質的研究との関わりの、発端から現在までの道のりの概略だが、もう1つ、筆者はその後、医学と医学教育、歯科学と歯科医学教育、看護学と看護教育、薬学と薬学教育など、医療系の領域での質的研究に深い関わりを持つようになった。そのことは、筆者の質的研究に大きな影響を与えていると考えられるので、それについても述べておく必要がある。

筆者は、1度目のトロント滞在后、数年経った頃から、名大医学部の複数の診療科から、質的研究についての研究協力を求められた。最初に接触があったのは、老年科だった。老年科の医師たちがミシガン大学との交流であちらに行くと、qualitative studyあるいは qualitative research ということをしつぱし言われる。しかしそんなことは聞いたことがない。そこで帰国してから名大図書館で調べると、そういうタイトルの書籍はすべて教育学部の大谷のところにある。だったら誰か行って話して来る必要がある。ついては、同じ研究科出身の君が良いだろう。と言われて研究室を訪ねて来たのは、本研究科出身で老年科で臨床心理士として働いていた茂木七香氏（現在、大垣女子短期大学教授・総合教育センター長）であった。この時は何も事前の連絡がなく訪ねて来られたが、老年科と聞いて何も不思議に思わなかった。それは、質的研究の欧米の書籍や論文を見ると、gerontology ということばがしばしば出てくるからであった。同科からはご依頼によって、1998年6月に医学部で「医学特論」を担当した。しかしこの科との関係は、その後とくに発展しなかった。

この後で関係が開かれたのは名大の総合診療科であった。同科は1998年に伴信太郎教授（現在、愛知医科大学医学教育センター特命教授、同センター長、シミュレーションセンター長）が着任し、独立した診療部門として出発し、総合診療やプライマリケアの研究のための新たな方法を模索していた。そこで2000年から同科に着任した鈴木富雄氏（現在、大阪医科大学特任教授、附属病院総合診療科科長）が筆者の研究室にたずねて来られた。そして2001年9月にはミシガン

大学と共同で、名古屋－ミシガンプライマリケア・フォーラムが開催され、そこに、質的研究で著名なネブラスカ大学の Creswell 教授が来て質的研究のプレカンファレンス・セミナーを担当する予定とのことで、筆者も参加させて頂くことになった。しかしその直前に起きたアメリカ同時多発テロ事件の影響で、Creswell 教授の来日は取りやめになってしまった。そのため、質的研究のセッションを替わって筆者が担当するよう要請があり、これをお引き受けした<sup>23</sup>。このように、欧米の医学研究の世界では、質的研究が重要視されるようになってきていたのに、日本の医学者たちはそれについてまったく知らなかったため、畑違いの筆者に依頼が来たのであった。教育学のようなディシプリン性（学問領域の固有性）の高い世界で育った筆者の目には、このように、畑違いであろうともそれを提供できると考えられる人物に躊躇なく依頼し、その人物を招くところは、医療系の積極的に先進的なところであると感じたが、この印象は、この後に記すようなその後のあらゆる経験によって、いっそう強くなっている。

しかし直接に同科の研究に参加するようになったのは、2回目のトロント滞在前の2003年に始まる研究への参加依頼であった。それは、欧米の雑誌に投稿する予定の医学教育の研究（つまりそれがその研究者の博士論文になる）についての、研究デザインの段階からのご相談であった。当時、筆者は、医学や医学教育の国際誌の論文に全く触れていなかったため、1991－1992年にトロントで学んでその後自分なりに発展させてきた質的研究についての認識が、医学や医学教育の国際誌の査読水準に適合するものかどうかまったく分からなかったが、研究デザインの段階から、注意深く、かつ効果的なデザインと実施が可能になるように援助した。その研究は実施され、最終的に医学教育の国際誌に採録された（Mukohara, Ban, Sobue, Shimada, Otani, Yamada, 2006）が、その際に、筆者が研究デザインの時に配慮したいくつかの点が査読者から評価されたことから、質的研究に対する筆者の認識が、医学の国際誌でも通用することが確認できた。同科からは、その後も同様なご依頼があり、その後さらに Nishigori, Otani, Uchino, Plint, Ban (2009), Saiki, Mukohara, Otani, Ban (2011), Aomatsu, Otani, Tanaka, Ban, van Dalen (2013), Takahashi, Aomatsu, Saiki, Otani, Ban (2018) の4件の研究に参加した。また、慈恵医大での博士論文指導にも参加し（Hirayama, Otani, Matsushima, 2017）、それ以外の医学系の共同研究にも参加した（Kojima, Nakayama, Otani, et. al. 2017）。

そしてその際の査読者とのやりとりなどを通して、国際誌での質的研究の査読の観点や水準、その動向やその変化等についても理解を発展させて来ることができた。

その後今日まで、同様の領域での質的研究の紹介や指導に関わることが増えたが、とくに、2009年から指導委員として参加させて頂いている東京慈恵会医科大学での臨床研究を指導するプロジェクト「プライマリケア現場における臨床研究者の育成」では、臨床疫学者や著名な臨床家と一緒に、筆者が主に質的な観点から臨床研究や医学教育研究に関わるようになった。このプログラムでは、量的な臨床研究について学んだ参加者から提出された研究計画を詳細に検討するため、非専門ながら、またいまだに「門前の小僧習わぬ経を読む」状態から抜け出せないながら、量的な臨床研究についての理解が少しずつ深まり、これも質的研究を相対化する貴重な契機となっている。

なお、それ以外に医学教育、医療者教育については、大谷 (2009, 2013b)、増永・大谷 (2013)、奥谷・浜田・Batty・大谷 (2007)、浜田・Lee・Ghavam-Rassoul・近藤・江崎・大谷・Batty (2010) などがある。

#### (4) 医療と医療者教育研究におけるプロトコル作成セミナー・ワークショップ

なお、医療系の学部では、以前から、IRB: Institutional Review Board (機関内倫理審査委員会) によって、研究倫理審査が大変厳しく行われてきた。しかしそこでの審査は、量的研究の伝統的規範で行われることが多い。その際、質的研究の研究計画は委員会に理解されず、許可されないこともあるし、許可されるとしても、不本意な修正を求められることが多い。そこで筆者は、医療における量的研究のプロトコル (研究計画書 research protocol) の書き方に準拠することで、量的な医療研究者にも理解しやすい、質的研究のプロトコルの書き方を開発し、これを上記の慈恵医大のプログラムで紹介してきたが、それを求めに応じて紹介するセミナー・ワークショップも、2015年から開始した。これは、研究計画書を書くだけでなく、質的な医療研究をよく理解するためにも有効なものとなっている。じっさい、これに参加した後で倫理審査委員会に提出した研究プロトコルが、初めて1度で審査に通ってしまったとか、これに参加したことで、査読者とのやりとりが円滑になり、論文が学会誌に採録されたという経験も聞いている。また、このワークショップは、国内だけでなく、ベトナムのホーチミン市医科大学で2回、モンゴル国立医科大学で2回実施している。

そのため、これを知った人文・社会科学系の研究者

から、同様なワークショップで、自分たちの領域でも学べるようなものを実施して欲しいとの要望が寄せられた。筆者は当初、これは、医療における量的研究の研究プロトコルに準拠した質的研究のプロトコルを書くワークショップとしてデザインしたので、医療と無関係な領域では、それは困難であろうと思っていた。しかしこのワークショップの内容を再検討すると、医療だけに限定される内容は、実際にはあまり多くないため、これをアレンジすれば、人文・社会科学系の研究者を対象にした質的研究のデザインのワークショップとして実施できるのではないかと考えられた。そこで、2018年に強い要請を受けたモンゴル国立教育大学で、このワークショップを実施した上で、すでに、今年の夏から日本でもこれを実施することになっている。

### 7. 以上の経験の相互の影響

なお、以上に述べたいくつかの要因は相互に関連しているとも考えられるので、それについても述べる。

質的研究の現在のパラダイムの中心は、社会構成主義的なもの、あるいは解釈主義的なものであると考えて良いと思うが、そこでは、たとえばインタビューというのは、語り手が初めから話す内容を持っているのではなく、聴き手が語り手にあることを問い、語り手がそれに答えたときに創出されるテキストであると考えられており、それは「共同構築的テキスト」と呼ばれる。インタビューはデータ採取であるから、量的研究の「測定」に相当する。それでインタビューを測定と考えれば、これは、測定した瞬間にその値が決まるのであるから、上記の量子力学の考え方に似ている。つまり筆者が社会構成主義的なパラダイムを大きな抵抗なく受け入れられるのは、異なる世界からのものではあるが、このような先行する類似のモデルを高校時代から有していたからではないかと考えることができる。

また、筆者が博士課程でハイデッガーを学んでいたことは、上記のように弁証法的な思考の訓練となっただけでなく、筆者の質的研究にとって重要な現象学的な背景となっていると考えられる。筆者は多様な質的研究のパラダイムを認めているし、どのようなパラダイムを志向する研究者にとっても有益な情報を提供したいと考えているが、個人的には、自分自身のそれは、解釈学的現象学 (伊賀, 2014) のパラダイムに一番近いと考えている。

また、筑波大学学術情報処理センターでプログラミングを学んだことは、解決すべき問題に対する手続きを解明して定式化し、それを問題に適用して解決する

姿勢をもたらしたと考えられる。これはまさに、現在その重要性が叫ばれ、2020年から小学校に導入される「プログラミング教育」である。さらにそこで、計量書誌学 bibliometrics の研究に手を染めたことは、語や概念を計量して意味を見いだすことの可能性について気づかせたと考えられ、後の、コンピュータを用いた授業逐語記録の分析研究につながったものと思われる。

そして長く教育学の世界に身を置いたことは、量的・実証的な研究の理解と、その規範を理解することの背景となっている。また、教育学の世界で当時普及していた上記のような工学主義的なロジックに対する疑問は、〈じっさい〉を観察することと、その際に、そこで支配的な文化を見て解明していくことの重要性についての認識を抱かせた<sup>24</sup>。

長崎大学時代に統計的検定などの相談に乗っていたことは、推測統計学についての基本的な考え方とその現実的な応用についての知識を獲得する機会となった。

合わせて2年にわたるトロント大学での滞在を通して、北米の質的研究の先端に触れられたことは十分意義があった。それだけでなく、そこで大学院生たちに、研究の概念的・理論的枠組み (conceptual / theoretical framework) と研究手法とを獲得させることを最重視していること、また学部生の課題も、小さな調査のようなことをさせてまとめさせるものがあり、そこでも研究手法というものも重視されていることを理解した。日本の文系の大学院、とくに筆者の所属する教育学の世界では、自立して研究を行える研究方法と研究方法論を獲得させることより、その領域のこれまでの研究の蓄積を知識として獲得させ、問いを立てさせることを重視しているように思える。もちろんそのことには十分に意味があり、重要である。しかしいくら問いを立てても、その問いを問う経験科学 empirical science 的な方法についての訓練はほとんど無い。それは、博士学位を取得させる必要のなかった旧来の文系の大学院に共通していたかもしれない。当時は、とにかく勉強をし、指導教員の抱持ちをして学会や研究会に参加しているうちに、他大学の先生の目に留まり、就職口が見つかってそこに就職するというスタイルの研究者養成と研究者採用が慣行としてなされており、そこでは、研究方法や研究方法論などというものを体系的に教える必要はなかった。しかし北米ではそれとまったく異なる状況にあり、文系でも課程博士を授与する時代になってきた日本も、必ずそういう状況になるだろうと、その時に直観した。

さらに、最初のカナダからの帰国後から今日まで続

けている教育実践への関わりは、上記のように、観察したことを言語化する訓練になっていたものと考えられる。

なお、SCAT では、コード化から理論化までをいくつかのステップに分けて実施する。それは、教育学では常識となっているプログラム学習やCAI (Computer Assisted Instruction) での「スモールステップの原則 principle of small step」(大きな課題をできるだけ小さな部分的課題に分けてひとつひとつ達成させるのが良いという、学習のための原則) を、質的データ分析に無自覚的に適用したものなのではないかと、ずいぶん後になって気づいた。

ところで、本稿を書く直前に、今期最後の「教育情報学講義」があった。これは、大学での筆者の最後の学部講義となるものであった。それで、いったい何を扱おうかと考えた結果、上記の「虚構の教材」に関する論文 (大谷, 1984) を取り上げることにした。この論文は、今読めば稚拙なものではあるが、簡潔で明晰であり、あまり長くなく、全て読むのに60分もかかからない。そのため解説をしながら皆で読み、その後、討論をするのに適していると考えた。また、この論文の扱っているのは録音教材であり、録音でなければこのような虚構を教材にすることはできないのだから、この論文はまさに教育におけるテクノロジー利用の問題を扱っているのだとその時に気がついたのだが、その意味でも「教育情報学講義」にふさわしいと考えた。同時に、筆者が研究を開始した頃の34年前の論文を筆者の最後の授業で扱うのは、くると円を描くようで、それはそれで何らかの意味があるのではないかといい気持ちが出た。

この論文は、名古屋大学に着任してからは、自分で読んだことがなかったと思う。しかし、筆者の領域の出身で、2年前に教育方法学領域に着任した坂本将暢准教授が、筆者の論文の中で最も好きなものと言ってくれたため、その時に一度、長崎大学のリポジトリからこの論文をダウンロードしてざっと読んで記憶はある。しかし今回あらためて読んでみると、この論文には、その後の筆者の研究の源泉が潜在していることが読み取れる。まずこの論文では、「テクノロジー」という言葉を使っていないが、上記のように、これはテクノロジーの教育利用の問題でもある。そして、目標にとらわれた評価がこのような教材を作らせるのであって、目標にとらわれない評価 goal free evaluation が重要であり、「OECD-CERI カリキュラム開発に関する国際セミナー」の報告書 (文部省, 1975) から、そのためには、「教授学習活動の目標が何であったに

せよ、その活動によってひき起こされるすべての事象 (events) を観察し記述することが望ましい」を引用している。当時、筆者は「質的研究」という言葉さえ知らなかったが、今これを読むと、これはまさに質的研究のことを言っていると理解せざるを得ない。筆者の、テクノロジーの教育利用への問題意識と、それを研究として成立させるための質的研究方法論への希求は、潜在的ではあっても、すでにこの時に強く抱かれていたのだと、再発見した次第である。

## 8. 結語：研究領域を超えた世界共通の研究言語としての質的研究

本稿では、筆者が追究してきた質的研究方法論そのものについては、ほとんど触れなかった。それはぜひ、大谷 (2019) を見て頂きたいと考えている<sup>25</sup>。

なお、医学の研究などに触れて筆者が深く感じることもある。それは、国際学術誌に掲載された医学や心理学の論文が世界中で通用するのは、それが英語で書かれているだけでなく、「量的研究」という共通の言語を使って実施され、記述されているからだということである。つまり「量的研究」は、計量的な経験科学的研究にとっての「世界共通の研究言語」である。ここでは、同じ領域の世界中の研究者との間で、研究成果の交流・共有と共同研究が行える。それだけでなく、異なる領域の研究者との間でも、研究成果の交流・共有と共同研究が行える。

筆者は、同様に、非計量的な経験科学的研究にとっての世界共通の研究言語として形成されてきたのが、「質的研究」なのだと考えている。非計量的な経験科学的研究では、世界の質的研究の考え方とその水準を学び、共通言語としての質的研究で問題を扱い、共通言語としての質的研究で発表することで、同じ領域の世界中の研究者との間で、研究成果の交流・共有と共同研究が行える。それだけでなく、全く異なる領域の研究者との間でも、研究成果の交流・共有と共同研究が行えるのである。このことを最後に強調しておきたい。

なお、本稿にあげたいいくつかのことがら以外にも、筆者が貴重な機会を提供されたことはたくさんあるが、ここにそのすべてを書くことはできなかった。また、これを書きながら気がついたこともあるし、上記の「虚構の教材」の論文に潜む、質的研究への当時の筆者の潜在的な希求に、今になって気づいたように、今は気づいていないがいつか気づくこともあると思われる。しかし、筆者の思慮の浅さ故に、提供されていて享受したのに、いつまでも自覚することのない貴重な

経験もまたあるに違いない。そのような、筆者にとつて潜在的なものも含め、多くの機会を提供し、多くの導きを下さった方々に深い謝意と敬意を表して、本稿を終えたい。

## 〔注〕

<sup>1</sup> じつはこれも海軍の規定通りである。なぜなら、軍艦のタラップは出港時刻の5分前に離岸するので、5分前に帰艦しなかった場合は海軍刑法第73条-第77条 (第7章 逃亡ノ罪) によって (作戦出動の場合は) 敵前逃亡とみなされ、死刑と規定されていたからである。しかしこれは、帰艦時刻が出港5分前に定められているのだから、逆に言えば出港時刻が帰艦時刻の5分後なのであって、筆者の考えでは、決して「5分前精神」ではない。

<sup>2</sup> それから20年ほど経った1997年頃、名古屋大学全学開放科目で半年だけラテン語を受講した。

<sup>3</sup> 「柳緑花紅真面目」は宋代の詩人、蘇東坡の言葉であるが、これは禅語でもある。

<sup>4</sup> TOSBAC-40は1台で大きな筆筒一棹ほどの大きさのものであり、3台あった。なお当然ながら今日のパソコンに比べてはるかに低い性能だった。

<sup>5</sup> Commodore PET2001, NEC PC-8001, Texas Instruments Ti-99, Hitachi Basic Master 等である。

<sup>6</sup> 本来であれば、研究計画を立てるときに、検定をするかしないかを決めておかなければならないのであるから、これは不合理な要請であったが、なんとかそれに対応するよう努力した。

<sup>7</sup> 1973年に設立。2015年3月末日をもって廃止。

<sup>8</sup> 現在、会津大学語学研究センター教授

<sup>9</sup> 現在、ニュージーランド、ワイカト大学高等教育教授・学習センター長

<sup>10</sup> 当時はまだ、それを情報教育のために行うという考えは普及していなかった。

<sup>11</sup> 現在では国際的に Transcript Based Lesson Analysis (TBLA) と呼ばれる。

<sup>12</sup> 当時、コンピュータが使えるということは、プログラミング言語でプログラミングができるということだった。

<sup>13</sup> この助成金の獲得は、本研究科比較・国際教育学講座の馬越徹教授 (後に桜美林大学教授、比較教育学会会長) のご指導と強力なご支援によるものであった。またそれは着任後3年目であり、当時の学科長の安彦忠彦教授を初めとする教育学科の先生方のご理解なくしては不可能なことであった。

<sup>14</sup> その際には、筆者のつたないいくつかの記録も、こ

の研究チームのデータに加えてくれたことが大変嬉しかったことを覚えている。

<sup>15</sup> これは当然、地域にもよると思うが、たとえば日本では大学教員が学校を訪問すると、しばしば玄関の前に旅館の玄関歓迎看板のようなものが置かれ、「〇〇大学〇〇先生、御指導よろしく申し上げます」のように書かれており、玄関を入ると下駄箱の番号1（多くは最上段の一番手前）からスリッパが出されて用意され、番号1は、そこから出したことを明示するかのように扉が開けたままにされている（これは脱いだ靴を入れるためでもあろうが、扉を開けておけば、その指導助言者に靴を入れさせることになるのだから、やはりこれは1番であることを明示するためではないかと解釈できる）。その後、校長室に招じ入れられてお茶とお菓子が振る舞われ、昼食時にはお寿司などを出して下さる場合もしばしばあった。なお、自家用車で訪問する場合は、駐車場も、たとえそこに水たまりがあってドアを開けると降りられない状態であっても、1番の場所が指定されることなどを経験している。筆者は、そのような関係性を変革すべく、学校を訪問する際は、上履きを持参して職員用の入り口から入ることを認めて頂いたり、昼食は弁当を持参したりして、筆者が観察者として、お客様でも指導者でもない関わり方を望んでいることを示した。これは受け入れられたが、管理職の異動があると、新任の管理職が、それを元に戻そうとして、その学校の教員から、これは筆者が研究のために望んでいることなのだから戻す必要はないと進言されたりしていた。

<sup>16</sup> 1990-1991（代表：永野和男）：教育工学の学術的基礎づけに関する総合的研究  
 1993-1994：学校教育におけるコンピュータ利用を対象としたエスノメソドロジカルな研究手法の開発  
 1996-1998：学校教育におけるコンピュータ利用の特質、問題、課題の解明を目的とする質的観察研究  
 1999-2001：学校教育におけるインターネット利用の問題と課題の解明を目的とする質的観察研究  
 2000-2001（代表：岡本敏雄）：Post Modern Ageにおける教育工学研究の体系化に関する総合的研究  
 2002-2004：教育テクノロジーと学校文化の間のコンフリクトと交互作用に関する質的研究  
 2008-2010：教育テクノロジー（視聴覚教育、教育工学）を専門とする教師のライフ・ヒストリー研究  
 2011-2014：明示的手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法の共有の研究

2014-2017：教育研究のための質的研究方法論としての授業研究の再構造化の試みとその課題の解明

<sup>17</sup> 文部科学省「海外先進教育実践研究支援プログラム」カナダ・トロント大学教育研究大学院（OISE）教育理論・政策学科 客員研究員

<sup>18</sup> 米国では、Church and State（宗教と国家）の分離原則によって、公教育では宗教教育が行えず、州立大学には神学部や司祭・牧師の養成課程がないのに対して、カナダは、憲法より上位に位置付く1867年の「英領北アメリカ法 British North American Acts」で公教育での宗教教育を認めているため、トロント大学にも各派の7つの神学大学院があり、この研究に好適であった。

<sup>19</sup> データ採取や研究結果の表象に芸術の方法を用いる質的研究。

<sup>20</sup> パフォーマンス・エスノグラフィについては、高尾、(2010) が詳しい。

<sup>21</sup> これらの論文は、名古屋大学機関リポジトリから多数ダウンロードされている。2017年11月22日から2018年11月22日までの同機関リポジトリ全体の文献の1年間の閲覧数のランキングでは、大谷（2008）は3,351件で1位、大谷（2011）は1,425件で5位である。

<sup>22</sup> このことについて、たとえば黒田（2017）は、「初学者に対するサポートが手厚い」としているが、SCATが初学者に向いている理由の1つとして、「着しやすくなるような環境整備が進んでいる」ことをあげている。すぐに分析に使えるエクセルのフォーマットが公開されていてダウンロードして利用できること、またどのように分析を進めるかを解説した「マニュアル的な役割を果たす論文」も無料でダウンロードして読むことができるし、「この内容はかなり詳しく」この論文を使えば、「特に他の参考資料を必要とせず、分析を行うことができ」たとしている。また、上記の Kaneko, et. al. (2018) も、日本のプライマリ・ケア研究における質的研究でSCATが一番多く使われている背景について、同様な環境要因を上げている。

<sup>23</sup> この頃、この後も、2003年10月の日本補綴歯科学会学術大会・教育講演などの要請を受けた。

<sup>24</sup> ことについては、大谷（1997, 2008b）等を参照。

<sup>25</sup> ただし本稿の内容の一部は、この大谷（2019）の「本書の著者の研究的背景」と重なっていることをお断りしておきたい。

## 〔和文文献〕

- 伊賀光屋 (2014) 解釈的現象学的分析 (IPA) の方法論. 新潟大学教育学部研究紀要 人文/社会科学編. 6 (2) : 169-192
- 大谷 尚 (1980) 教育学学術文献情報に関する研究 —ERIC を用いたビブリオグラフィックな調査—. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告. 3 : 257-267
- 大谷 尚 (1982a) パーソナルコンピュータを用いた音の機能を持つ CAI システム —算数モジュール教材の開発—. 日本教育工学雑誌. 7 : 87-97
- 大谷 尚 (1982b) 読譜指導のための CMI システムの開発 —教育情報処理の具体的検討—. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告. 5 : 223-238
- 大谷 尚 (1984a) パーソナルコンピュータを用いた読譜指導のための CMI システム —音楽的聴感覚調査とそのフィードバックシステム—. 日本教育工学雑誌. 9 : 71-86
- 大谷 尚 (1984b) 虚構の教材に関する一考察 —虚構の録音機材をめぐる—. 長崎大学教育学部教育科学研究報告. 31 : 45-55
- 大谷 尚 (1985) パーソナルコンピュータによる授業記録分析システムのデータ形式とデータ作成の効率化について. 長崎大学教育学部大学教育方法等改善研究プロジェクト報告書. 181-191
- 大谷 尚 (1989) 授業研究の一手法としての逐語記録に対する計量的な分析について. 名古屋大学教育学部紀要 —教育学科—. 36 : 327-338
- 大谷 尚 (1995) コンピュータを用いた授業を対象とする質的研究の試み. 日本教育工学雑誌. 18 (3/4) : 189-197
- 大谷 尚 (1996a) コンピュータが教室にもたらすもの. 教育と医学. 500 : 64-69
- 大谷 尚 (1996b) コンピュータが小学校や中学校にもたらすもの. 名古屋大学情報処理教育センター広報. 4-9
- 大谷 尚 (1996c) コンピュータは教室に何をもたらすか —コンピュータを用いた授業を対象とした観察研究と分析の必要性—. 日本教育方法学会編. 戦後50年, いま学校を問い直す (教育方法25. 日本教育方法学会編. 明治図書. 129-139
- 大谷 尚 (1997a) インターネットは学校教育にとってトロイの木馬か —テクノロジーの教育利用と学校文化—. 学習評価研究. 29 : 42-49
- 大谷 尚 (1997b) 教育工学からみた質的授業研究. 平山満義 編. 質的研究法による授業研究 —教育学・教育工学・心理学からのアプローチ—. 北大路書房. 123-181
- 大谷 尚 (1999) 「質的研究」の文脈からみた日本の授業研究の位置づけに関する試論 —研究成果の交流と共有を展望して—. 教育方法学研究. 24 : 29-37
- 大谷 尚 (2005) 質的アプローチは研究に何をもたらすか. 質的心理学研究. 4 : 17-28
- 大谷 尚 (2006) 教育と情報テクノロジーに関する検討 —ハイデッガーの『技術への問い』をてがかりとして—. 教育学研究. 173(2) : 14-28
- 大谷 尚 (2008a) 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 —着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学). 54(2) : 27-44
- 大谷 尚 (2008b) 学校文化と「神神の微笑モデル」—テクノロジーと教授・学習文化とのコンフリクト—. 無藤 隆/麻生 武 編. 質的心理学講座 第1巻 第9章. 東大出版会. 233-266
- 大谷 尚 (2008c) 質的研究とは何か —教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして. 教育システム情報学会誌. 25 (3) : 340-354
- 大谷 尚 (2009) 医学教育修士プログラムについて —トロント大学の医学教育学修士課程の紹介と教育学の立場からの検討—. 特集/次世代の医学教育者の育成に向けて. 医学教育. 40(4) : 255-258
- 大谷 尚 (2011) SCAT: Steps for Coding and Theorization —明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手. 感性工学. 10(3) : 155-160
- 大谷 尚 (2012) 日本教育工学会 監修. 坂元昂・岡本敏雄・永野和男 編著. 『教育工学選書 教育工学とはどんな学問か』担当 第3章「近接領域からみた教育工学 3.3 教育学からみた教育工学」. ミネルヴァ書房 2012
- 大谷 尚 (2013a) 私には夢がある —量的研究と質的研究を包括した研究認識論の創造のために—. 質的心理学フォーラム. 5 : 93
- 大谷 尚 (2013b) 石崎雅人・野呂幾久子 監. 『これからの医療コミュニケーションへ向けて』担当 I-第3章. 「医療コミュニケーションへのアプローチと質的研究手法の機能と意義」. 篠原出版新社. 32-51
- 大谷 尚 (2016a) 質的研究とは何か —その意義と方

- 法一. 日本歯科医師会雑誌. 68(12): 1125-1134
- 大谷 尚 (2016b) 質的研究とは何か —実践者に求められるその本質的で包括的な理解のために—. 学校健康相談研究. 13(1): 2-13
- 大谷 尚 (2017a) 質的研究とは何か. 薬学雑誌. 137(6): 653-658
- 大谷 尚 (2017b) 質的研究はどのように進めれば良いのか —しばしばなされる質問にもとづいたいくつかの具体的なガイド—. 学校健康相談研究. 14(1): 4-12
- 大谷 尚 (2019) 質的研究の考え方 —研究方法論からSCATによる分析まで—. 名古屋大学出版会
- 大谷 尚・八田昭平 (1987) コンピュータを用いた授業 (逐語) 記録の分析手法の研究. 日本教育工学雑誌. 11(2/3): 117-131
- 大谷 尚・松原伸一 (1984) 出現語の頻度分布にもとづく授業の特徴化について. 電子通信学会教育技術研究報告. 12: 1-6
- 奥谷珠美・浜田久之・Batty, Helen, P・大谷 尚 (2007) カナダにおける専門職間教育の新しい流れ. 医学教育. 38(3): 181-185
- グレイザー, B. G. / ストラウス, A. L. 著. 後藤 隆 / 大出春江 / 水野節夫 訳 (1996) データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか. 新曜社
- 黒田真生 (2017) 薬剤師のためのEBMお悩み相談所—基礎から実践まで 質的分析の具体例—SCATについて  
<https://ameblo.jp/intelligent-pharmacist/entry-12246793469.html> 2018.11.23 閲覧
- 斉藤秀雄 (1956) 指揮法教程. 音楽之友社
- 高尾 隆 (2010) 演劇教育研究の方法論の現在 —演劇教育研究の質的方法化と質的研究のパフォーマンス化の接点で. 演劇学論集. 50. 61-77
- デンジン, N. K.・リンカン, Y. S. 編 (2006) 平山満義 監訳 大谷 尚・伊藤 勇 編訳『質的研究ハンドブック 3巻 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房
- 沼野一男 (1971) 教育工学. 日本放送出版協会 NHK市民大学叢書
- 浜田久之・Lee, Shirley・Ghavam-Rassoul, Abbas・近藤久義・江崎宏典・大谷 尚・Batty, Helen P. (2010) 客観的指導能力評価 (Objective Structured Teaching Evaluation: OSTE)の実施と分析. 医学教育. 41(5): 325-335
- 古田庄平・大谷 尚 (1985) 音楽的聴音能力の実態調査に基づく読譜指導. 長崎大学教育学部大学教育方法等改善研究プロジェクト報告書. 116-128
- 増永悦子・大谷 尚 (2013) がん患者遺族ボランティアによる語りの分析 —緩和ケア病棟でボランティアをする意味の解明—. 日本緩和医療学会誌. 8(2): 351-361
- 森 有正 (1968) バビロンの流れのほとりにて. 筑摩書房
- 文部省 (1975) カリキュラム開発の課題 カリキュラム開発に関する国際セミナー報告書. 大蔵省印刷局. 51-52

### 〔英文文献〕

- Aomatsu, M., Otani, T., Tanaka, A., Ban, N., van Dalen, J. (2013) Medical Students' and residents' conceptual structure of empathy: a qualitative study. *Education for Health*. 26(1): 4-8
- Brine, J. (1988) *Collaborative Publishing and Word Processing in the Primary Curriculum: Technology and Side-effects*. A Thesis Submitted in conformity with the requirements for the Degree of PhD in the University of Toronto
- Hirayama, Y., Otani, T., Matsushima, M. (2017) Japanese citizens' attitude toward end-of-life care and advance directives: a qualitative study. *Journal of General and Family Medicine*. 18(6): 378-385
- Nishigori, H., Otani, T., Uchino, M., Plint, S., Ban, N. (2009) I came, I saw, I reflected: a qualitative study into learning outcomes of international electives for Japanese and British medical students. *Medical Teacher*. 31(5): 196-201
- Johnson, E. M. (1987) *Social History in the Information Age: The Role of Computers and Database Management*. A Thesis Submitted in conformity with the requirements for the Degree of PhD in the University of Toronto
- Takashi Otani (2005) A Life Story Study of Technology Specialist Teachers in Japan: Latent Significance of Lack of Human Content in Educational Media and Technologies, in Piet Kommers & Griff Richards eds. (2005) *Proceedings of ED-MEIA 2005. World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia & Telecommunications, Association for the Advancement of Computing in Education*.
- Kaneko, M., Aoki, T., Ohta, R., Inoue, M., Modi, R. N.

- (2018) An analysis of qualitative and mixed methods abstracts from Japanese, UK and US primary care conferences. *Asia Pacific Family Medicine*. 17(11)
- Kojima, M., Nakayama, T., Otani, T. et. al. (2017) Integrating patients' perceptions into clinical practice guidelines for the management of rheumatoid arthritis in Japan. *Modern Rheumatology*. 27(6): 924–929
- Mukohara, K., Ban, N., Sobue, G., Shimada, Y., Otani, T., Yamada, S. (2006) Follow the Patient: Process and Outcome Evaluation of Medical Students' Educational Experiences Accompanying Outpatients. *Medical Education*. 40: 156–165
- Otani, T. (2005) A Life Story Study of Technology Specialist Teachers in Japan: Latent Significance of Lack of Human Content in Educational Media and Technologies, in Piet Kommers & Griff Richards eds. (2005) Proceedings of ED-MEIA 2005. *World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia & Telecommunications, Association for the Advancement of Computing in Education*. (論文は全6ページ。ProceedingsはCD-ROM収録)
- Otani, T. (2010) “Smiles of Gods”: Japanese school-teachers' interpersonal metamorphism of technologies into something that fits in pre-technological traditional educational settings. *Proceedings of ED-MEIA 2010. World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia & Telecommunications, Association for the Advancement of Computing in Education*. 2234–2239
- Ragsdale, R. G. (1988) *Permissible Computing in Education: Values, Assumptions, and Needs*. Praeger Publishers
- Saiki, T., Mukohara, K., Otani, T., Ban, N. (2011) Can Japanese students embrace learner-centered methods for teaching medical interviewing skills?. *Medical Teacher*. 33(2): 69–74
- Takahashi, N., Aomatsu, M., Saiki, T., Otani, T., Ban, N. (2018) Listen to the outpatient: qualitative explanatory study on medical students' recognition of outpatients' narratives in combined ambulatory clerkship and peer role-play. *BMC Medical Education*. 18(229)

## Studies on Technology in Education and Qualitative Research Methodologies

Takashi OTANI\*

The purpose of this essay is to reflect on the author's personal history of studies on technology in education and qualitative research methodologies, in order to consider the path he has followed and to discern the way ahead as a researcher.

He firstly reveals that he had lots of questions about education and schools even when he was an elementary school student. He then changes the topic to his high school years. His school was newly established, and therefore had various problems. At that time, he also wondered about the educational technology installed at the elementary school affiliated with his high school, which remained unused. He was hoping to study education in college, then lost his interest in traditional "education study" while still retaining a deep interest in education itself. Around that time, he met Professor Ono and wrote a graduation thesis under his academic supervision. This led to entering the Graduate School of Education, where he began studying under Professor Ono's exceedingly unique academic advice. He also started learning about computers at the university's academic computing center under Professor Nakayama. Furthermore, was briefly involved in a Classroom CAI (Computer Assisted Instruction) project.

Following this significant experience, he took a position at the Center for Educational Technology at the Faculty of Education, Nagasaki University. He struggled with mini-computers there, but soon started to develop various applications for personal computers in education. He also developed an original lesson analysis system with a personal computer and input Japanese transcripts into it. At the same time, he helped students in statistics. He was studying it with Professor Terasaki of the university. At that time, he identified a lot of questionable lessons in the university laboratory school, and wrote a related research article.

He also worked for the removal of educational instruments, which were no longer being used in public school classrooms. The educational instruments had been installed for a big national educational technology project that had finished before he moved to Nagasaki. It seemed contradictory to him that such enormous project had completed but nothing remained except for such unused instruments.

He was not satisfied with simply making positive statements about the functions of educational technologies in those days, either. He had an inherent desire to conduct his own empirical study to examine the meaning and significance of technology use in education including its negative aspects.

In this frame of mind, and during his last year in Nagasaki, he met two young Canadian researchers of educational technology: Dr. Brine and Dr. Johnson. They immediately understood his research interest and offered to help. After they left Japan, they sent him their PhD Dissertations and a book written by their academic advisor Professor Ronald G. Ragsdale of the University of Toronto. His book was quite unique and full of considerations about the meaning of computer use in education from both positive and negative viewpoints.

This author then moved to Nagoya University and began investigating an empirical research approach relevant to classroom computer uses and their socio-cultural aspects. He had gradually understood that qualitative research methods are the very ones that could enable him to carry out such research, and that Professor Ragsdale was the very researcher who had been engaged in such

research.

He visited the Ontario Institute for Studies in Education at the University of Toronto and commenced a qualitative research project on computer uses in education working with Professor Ragsdale and his team for a year funded by the Japan Foundation. Being in Canada provided him with the opportunity to see Japan's education from the outside, and he learned a lot about educational programs and researcher training in North American graduate schools.

After he had returned to Japan, he started localizing the qualitative approaches to adjust them to the socio-cultural context of Japan's schools, while also trying to transform the relationship between schoolteachers and the researcher. He was also active in discussion with quantitative researchers. This had now become a precious foundation for him to have a comprehensive understanding of "research" which included both quantitative and qualitative methods. He also started his own qualitative research on educational computing.

He was also granted an opportunity to work for an additional year at the University of Toronto, which was funded by MEXT. The purpose of the stay was the investigation of graduate programs for teachers in comparison with graduate programs of medical, legal, and ecclesiastical professions, which were the traditional professions in European culture. He also aimed at checking his own qualitative study which he had been developing by himself with the development of qualitative studies at the University of Toronto where he first engaged in it. He had opportunities to observe state-of-the-art qualitative studies, such as art based/informed studies and performance ethnographies.

After returning to Japan from Canada, he developed a graduate seminar focused on qualitative research methodologies. And he created an original qualitative data analysis method "SCAT" (Steps for Coding and Theorization). SCAT has been spreading to various research fields including the area where quantitative approaches were absolutely dominant previously.

SCAT does not mix the codes from interviews or observations. SCAT always analyzes each interview and each observation in the same manner that class room analysis (lesson study) is done, lesson by lesson. That is, the integrity of each lesson is maintained and it is studied as a lesson. Thus, the codes from different interviews or observations are not mixed, and moreover, SCAT does not ignore the continuity and time-sequential aspect of each interview or observation.

Since before his second stay at the University of Toronto, he had been participating in medical and medical education research as a qualitative researcher and as an education researcher. This aspect of his work has been undergoing development year by year. At the same time, he has been working with quantitative medical researchers to train medical doctors in their clinical research skills. This has been a precious opportunity for him to acquire a relativized perspective on quantitative and qualitative approaches in alternative context.

This has also enabled him to start a "research protocol seminar and workshop in medical and medical education (health science and health professionals education)". He has started disseminating it into humanities and social sciences. In turn, he is reflecting on the mutual influence of above mentioned elements of his research opportunities and experiences.

Finally, he argues that qualitative research is such an "international research language" for non-numeric empirical sciences that it not only enables you to exchange and share the research outcomes and cooperate with international researchers of the same research areas, but also it enables meaningful communication among even those researchers with different research areas.

---

\* Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

\* Professor, Applied Social System Institute of Asia, Nagoya University

## 大谷 尚 教授 略歴



1953年10月29日 東京都生まれ

## 【職 歴】

2017年4月1日	名古屋大学 アジア共創教育研究機構	教 授
	名古屋大学 大学院教育発達科学研究科	教 授（兼務）
	名古屋大学 大学院教育発達科学研究科 附属高大接続研究センター	センター長（併任）
2015年4月1日	名古屋大学 大学院教育発達科学研究科 附属高大接続研究センター	センター長（併任）
2013年4月1日	名古屋大学 大学院教育発達科学研究科 附属中等教育研究センター	センター長（併任）
2013年4月1日	名古屋大学 大学院教育発達科学研究科	副研究科長（併任）
2010年4月1日	名古屋大学 教育学部附属中・高等学校	校 長（併任）
2007年4月1日	名古屋大学 大学院教育発達科学研究科	副研究科長（併任）
2000年4月1日	名古屋大学 大学院教育発達科学研究科 学校情報環境学講座	教 授
1999年4月1日	名古屋大学 教育学部 人間発達科学科 学校教育科学講座	教 授
1997年4月1日	名古屋大学 教育学部 人間発達科学科 学校教育科学講座	助 教 授
1989年4月1日	名古屋大学 教育学部 教育学科 教育情報学講座	助 教 授
1986年10月1日	長崎大学 教育学部 附属教育実践研究指導センター	講 師
1986年4月1日	長崎大学 教育学部 附属教育実践研究指導センター（改組による）	助 手
1979年4月1日	長崎大学 教育学部 附属教育工学センター	助 手

## 【学 歴】

1979年3月31日	筑波大学大学院 博士課程教育学研究科（5年一貫制博士課程）	中 退
1976年4月1日	筑波大学大学院 博士課程教育学研究科（5年一貫制博士課程）	入 学
1976年3月31日	東京教育大学 教育学部 教育学科 教育学専攻	卒 業
1972年4月1日	東京教育大学 教育学部 教育学科 教育学専攻	入 学
1972年3月31日	神奈川県 私立桐蔭学園高等学校	卒 業

## 【公的海外派遣・在外研究】

2018年8月－2018年8月	国際協力事業団（JICA）草の根技術協力（地域経済活性化特別枠）事業「ベトナム南部における科学的根拠に基づく保健医療サービス向上のための、大学と医師会の連携による医師育成：ベトナム・ホーチミン市医科薬科大学における疫学研修プロジェクト」
2017年8月－2017年8月	国際協力事業団（JICA）草の根技術協力（地域経済活性化特別枠）事業「ベトナム南部における科学的根拠に基づく保健医療サービス向上のための、大学と医師会の連携による医師育成：ベトナム・ホーチミン市医科薬科大学における疫学研修プロジェクト」
2005年3月－2006年3月	文部科学省「海外先進教育実践研究支援プログラム」カナダ・トロント大学教育研究大学院（OISE）教育理論・政策学科 客員研究員
1991年8月－1992年7月	国際交流基金（Japan Foundation）「学者等長期派遣」カナダ・トロント大学 教育研究大学院（OISE）測定・評価・コンピュータ利用学科 客員研究員

## 大谷 尚教授 略歴・研究業績

1988年7月－1988年8月 国際協力事業団（JICA）派遣専門家 中国（北京市，昆明市，上海市）  
1987年7月－1987年8月 国際協力事業団（JICA）派遣専門家 中国（北京市，長春市，瀋陽市，西安市）

### 【所属学会（委員・役員）】

日本教育学会，日本教育方法学会，日本教育工学会（編集委員会委員，理事，企画委員会委員長（担当理事），研究会委員会委員，FD委員会委員長（担当理事），評議員），日本科学教育学会（編集委員会委員），日本質的心理学会（理事，編集委員会委員），日本プライマリケア連合学会，日本医学教育学会（医学教育マスターコース検討委員会委員，医学教育専門家育成検討委員会委員，医学教育専門家制度委員会ワーキンググループ・アドバイザー）

### 【所属協会・研究団体（役員）】

日本教育工学協会（理事，評議員），学習工学研究会（会長），中部スタディプレインズ（名誉会長）

### 【客員教員等】

2018年－現在 愛知医科大学 客員教授  
2017年－現在 藤田医科大学 医学部アドバイザー，医学部プログラム評価委員会委員長  
2009年－現在 東京慈恵会医科大学「プライマリケア現場の臨床研究者の育成」指導委員

### 【非常勤講師】

2014年－現在 岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科  
2014年－現在 三重大学 大学院医学系研究科  
2014年－2015年 広島大学 大学院医歯薬保健学総合研究科  
2013年－2014年 お茶の水女子大学 大学院人間文化創成科学研究科  
2011年－現在 帝京平成大学 大学院薬学研究科  
2010年－2011年 愛媛大学 大学院教育学研究科  
2009年－2011年 東京大学 大学院教育学研究科  
2000年－現在 南山大学 全学司書・司書教諭科目（現科目名「情報メディアの活用」）  
1998年－1999年 鳴門教育大学 大学院学校教育研究科  
他に富山大学 教育学部 等

### 【他大学・他機関の委員等】

2014年－現在 長崎大学病院 臨床研修管理委員会 委員  
2012年－2012年 文部科学省初等中等教育局 企画審査委員会 委員  
2010年－2013年 名古屋市立高等学校教科用図書選定委員会 副委員長  
2009年－現在 国立病院機構 名古屋医療センター 臨床研修管理委員会 委員  
2008年－現在 ホスピス聖霊（名古屋聖霊病院緩和ケア病棟）後援会代表  
2008年－2013年 長崎大学「大学病院連携型高度医療人養成推進事業 GP」委員  
2007年－2009年 国立病院機構 長崎医療センター 臨床研修管理委員会 委員  
2001年－2003年 豊田市 教育行政計画策定委員会 国際化・情報化部門 副委員長  
1999年－2004年 名古屋市 視聴覚教育センター運営審議会 委員

### 【受賞等】

2018年10月22日 モンゴル国立教育大学 名誉博士号 受称

## 研究業績

### 【著書】

- 大谷 尚 (2019) 『質的研究の考え方 —研究方法論から SCAT による分析まで—』. 名古屋大学出版会
- 大谷 尚 (2018) 『質的心理学辞典』(項目担当). 新曜社
- 大谷 尚 (2013) 石崎雅人・野呂幾久子 監. 『これからの医療コミュニケーションへ向けて』担当 I-第3章. 「医療コミュニケーションへのアプローチと質的研究手法の機能と意義」. 篠原出版新社. 32-51
- 大谷 尚 (2012) 日本教育工学会 監修. 坂元昂・岡本敏雄・永野和男 編著. 『教育工学選書 教育工学とはどんな学問か』担当 第3章「近接領域からみた教育工学 3.3 教育学からみた教育工学」. ミネルヴァ書房 2012
- 大谷 尚 (2008) 無藤隆・麻生武 編. 『質的心理学講座 第1巻』. 担当 第9章「学校文化と『神神の微笑モデル』—テクノロジーと教授・学習文化とのコンフリクト—」. 東大出版会. 233-266
- 大谷 尚 (2008) コンピュータ利用教育協議会 編. 『学びとコンピュータハンドブック』担当「教育実践研究」東京電機大学出版局. 30-33
- 大谷 尚・伊藤 勇 編訳. 『質的研究ハンドブック 3巻 質的研究資料の収集と解釈』. N.K. デンジン・Y.S. リンカン 編. 平山満義 監訳. 北大路書房
- 大谷 尚 (2005) 『人工知能学事典』(項目担当). 共立出版
- 大谷 尚 (2004) 日本教育方法学会 編. 『現代教育方法事典』(項目担当). 図書文化社
- 大谷 尚 (2004) 西之園晴夫・宮寺晃夫 編著. 『教育の方法と技術』担当 第2章「教育システム(組織)の新しいパラダイム —フリースクールやホームスクールから日本の学校を考える—」. ミネルヴァ書房. 31-55
- 大谷 尚 (2004) 松本伊瑳子・金井篤子 編. 『ジェンダーを科学する —男女共同参画社会を実現するために—』担当 第II部「学術におけるジェンダー7. 教育とジェンダー」. ナカニシヤ出版. 189-203
- 大谷 尚 (2001) 山口 満 編著. 『現代カリキュラム研究 —学校におけるカリキュラム開発の課題と方法—』担当 第3部「現代社会とカリキュラム開発」. 11章. 情報化時代の教育課程の在り方 —新たな学校文化を創造するために—. 学文社. 138-151
- 大谷 尚 (1997) 平山満義 編. 『質的研究法による授業研究 —教育学・教育工学・心理学からのアプローチ—』担当「教育工学からみた質的授業研究」. 北大路書房. 123-181
- 大谷 尚 (1997) 赤堀侃司 編. 『大学授業の技法』担当「メーリングリストを活用した授業のサポート」. 「授業内レポートを用いた受講者とのコミュニケーション」有斐閣. 48-51. 278-281
- 大谷 尚 (1996) 河野重男 監修・赤堀侃司 編. 『教職研究:情報化社会に求められる資質・能力と指導』担当「情報を交流する能力」. 教育開発研究所. 102-105
- 大谷 尚 (1991) 名古屋大学公開講座委員会 編. 『名古屋大学放送(テレビ)公開講座テキスト. 情報と人間』担当 第9章・第10章「学校教育の情報化」. 117-134
- 大谷 尚 (1985) 小野慶太郎 編. 『現代教育の理論と実践』担当 第3章3「教材としての映像の問題」. 学術図書出版社. 171-178

### 【研究報告書(研究代表者のもののみ)】

- 大谷 尚 (2005) 『教育テクノロジーと学校文化の間のコンフリクトと交互作用に関する質的観察研究』『2002年度~2004年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書』(研究課題番号14580214) 研究代表者 大谷 尚
- 大谷 尚 (2002) 『学校教育におけるインターネット利用の問題と課題の解明を目的とする質的観察研究』『1991年度~2001年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書』(研究課題番号11680217) 研究代表者 大谷 尚
- 大谷 尚(1999) 『学校教育におけるコンピュータ利用の特質, 問題, 課題の解明を目的とする質的観察研究』『1996年度-1998年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書』研究代表者 大谷 尚
- 大谷 尚 (1993) 『学校教育におけるコンピュータ利用を対象としたエスノメソドロジカルな研究手法の開発』(単

著) 1993年度－1995年度科学研究費補助金 一般研究 (C) 研究成果報告書 研究代表者 大谷 尚

## 【論文】

- Noriyuki Takahashi, Aomatsu Muneyoshi, Takuya Saiki, Takashi Otani, Nobutaro Ban (2018) Listen to the outpatient: qualitative explanatory study on medical students' recognition of outpatients' narratives in combined ambulatory clerkship and peer role-play. *BMC Medical Education*. 18(229)
- 大谷 尚 (2018) 「高大接続型選抜を担うアドミッションオフィサー養成プログラムの構築に関する研究」に関する調査報告2. 大学入学者選抜に関する全米大会への参加報告. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要. 2(3): 20-27
- 大谷 尚・依田理恵子 (2018) 「高大接続型選抜を担うアドミッションオフィサー養成プログラムの構築に関する研究」に関する調査報告1. アメリカの大学のアドミッション部門とアドミッションズ・オフィサーに関する調査報告. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要. 2(3): 3-19
- 大谷 尚 (2017) 質的研究はどのように進めれば良いのか —しばしばなされる質問にもとづいたいくつかの具体的なガイド—. 学校健康相談研究. 14(1): 4-12
- 大谷 尚 (2017) 質的研究とは何か. 薬学雑誌. 137(6): 653-658
- Yoko Hirayama, Takashi Otani, Masato Matsushima (2017) Japanese citizens' attitude toward end-of-life care and advance directives: a qualitative study. *Journal of General and Family Medicine*. 18(6): 378-385
- 大谷 尚 (2016) 質的研究とは何か —実践者に求められるその本質的で包括的な理解のために—. 学校健康相談研究. 13(1): 2-13
- Masayo Kojima, Takeo Nakayama, Takashi Otani, et. al. (2017) Integrating patients' perceptions into clinical practice guidelines for the management of rheumatoid arthritis in Japan. *Modern Rheumatology*. 27(6): 924-929
- 大谷 尚 (2016) 質的研究とは何か —その意義と方法—. 日本歯科医師会雑誌. 68(12): 1125-1134
- 大谷 尚 (2016) 質的研究と学校救急看護研究. 学校救急看護研究. 日本学校救急看護学会. 9(1): 1
- 青松棟吉・大谷 尚・西城卓也. 医学教育研究における研究倫理 (2014) 医学教育. 45(4): 249-274
- 小嶋雅代・小嶋俊久・難波大夫・茂木七香・大谷 尚・他 (2013) 関節リウマチ患者は薬物治療の変化をどのように感じているか —フォーカスグループによる質的研究—. 中部リウマチ. 43(1): 17-20
- 増永悦子・大谷 尚 (2013) がん患者遺族ボランティアによる語りの分析 —緩和ケア病棟でボランティアをする意味の解明—. 日本緩和医療学会誌. 8(2): 351-361
- Muneyoshi Aomatsu, Takashi Otani, Ai Tanaka, Nobutaro Ban, Jan van Dalen. (2013) Medical Students' and residents' conceptual structure of empathy: a qualitative study. *Education for Health*. 26(1): 4-8
- 大谷 尚 (2013) 私には夢がある —量的研究と質的研究を包括した研究認識論の創造のために—. 質的心理学フォーラム. 5: 93
- 藤崎和彦・田川まさみ・西城卓也・井内康輝・錦織 宏・渡邊洋子・大谷 尚・守屋利佳・吉岡俊正・吉田素文・鈴木康之 (2012) 日本医学教育学会認定医学教育専門家資格制度創設への提言. 医学教育. 43(3): 221-231
- Takuya Saiki, Kei Mukohara, Takashi Otani, Nobutaro Ban. (2011) Can Japanese students embrace learner-centered methods for teaching medical interviewing skills?. *Medical Teacher*. 33(2): 69-74
- 大谷 尚 (2011) SCAT: Steps for Coding and Theorization —明示の手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手. 感性工学. 10(3): 155-160
- 浜田久之・Lee, Shirley・Ghavam-Rassoul, Abbas・近藤久義・江崎宏典・大谷 尚・Batty, Helen P. (2010) 客観的指導能力評価 (Objective Structured Teaching Evaluation: OSTE) の実施と分析. 医学教育. 41(5): 325-335
- 大谷 尚 (2010) 情意的な内容の大切さと放送教材・映像教材の力の見直し. 視聴覚教育. 750: 4-5
- Takashi Otani (2010) "Smiles of Gods": Japanese schoolteachers' interpersonal metamorphosis of technologies into something that fits in pre-technological traditional educational settings. *Proceedings of ED-MEIA 2010. World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia & Telecommunications, Association for the*

*Advancement of Computing in Education*. 2234-2239

- 大谷 尚 (2009) 医学教育修士プログラムについて—トロント大学の医学教育学修士課程の紹介と教育学の立場からの検討—。特集 / 次世代の医学教育者の育成に向けて。医学教育, 40(4) : 255-258
- 鈴木康之・吉岡俊正・吉田素文・田川まさみ・錦織 宏・西城卓也・守屋利佳・大谷 尚・渡邊洋子 (2009) 「医学・医療教育学の専門家養成に関するニーズ調査結果」。特集 / 次世代の医学教育者の育成に向けて。医学教育, 40(4) : 237-241
- 鈴木康之・吉岡俊正・吉田素文・田川まさみ・錦織 宏・西城卓也・守屋利佳・大谷 尚・渡邊洋子 (2009) 「序章」。特集 / 次世代の医学教育者の育成に向けて。医学教育, 40(4) : 235-236
- 谷井淳一・大谷 尚・無藤 隆・杉森伸吉・山川法子・坂本将暢 (2009) 子ども対象の表現活動効果測定尺度の作成と尺度を用いての演劇ワークショップの評価。ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校紀要, 43 : 49-62
- 鈴木・吉岡・吉田・田川・錦織・西城・守屋・大谷・渡邊 (2009) 医学・医療教育学の専門家養成に関するニーズ調査結果。医学教育, 40(2) : 237-241
- Hiroshi Nishigori, Takashi Otani, Minako Uchino, Simon Plint and Nobutaro Ban (2009) I came, I saw, I reflected: a qualitative study into learning outcomes of international electives for Japanese and British medical students. *Medical Teacher*, 31(5): 196-201
- 谷井淳一・大谷 尚・無藤 隆・杉森伸吉・山川法子・坂本将暢 (2008) 劇指導者はいかにして子どもたちの想像力を引き出すのか。ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校紀要, 42 : 17-32
- 大谷 尚 (2008) 質的研究とは何か—教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして。教育システム情報学会誌, 25(3) : 340-354
- 長谷川元洋・大嶽達哉・大谷 尚 (2008) ネットいじめに対する教師の対応の教育的・法的問題の解明と課題の検討—ある公立中学校での事例を手がかりに。情報ネットワーク・ローレビュー, 7 : 107-113
- 大谷 尚 (2008) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54(2) : 27-44
- 長谷川元洋・大谷 尚 (2007) 59. 個人情報保護法全面施行後の初等中等教育機関の個人情報保護の現状と問題。情報ネットワーク・ローレビュー, 6 : 121-133
- 奥谷珠美・浜田久之・Batty, Helen, P・大谷 尚 (2007) カナダにおける専門職間教育の新しい流れ。医学教育, 38(3) : 181-185
- 大谷 尚 (2006) 教育と情報テクノロジーに関する検討—ハイデッガーの『技術への問い』をてがかりとして—。教育学研究, 173(2) : 14-28
- 坂本将暢・大谷 尚 (2006) 発話のリズムに着目した発話分析の手法の一提案—質的研究におけるデータの解釈とコード化の支援のために—。日本教育工学会論文誌, 30(1) : 37-49
- Kei Mukohara, Nobutaro Ban, Gen Sobue, Yasuhiro Shimada, Takashi Otani, Seiji Yamada (2006) Follow the Patient: Process and Outcome Evaluation of Medical Students' Educational Experiences Accompanying Outpatients. *Medical Education*, 40: 156-165
- 長谷川元洋・大谷 尚 (2005) 学校における児童・生徒に関する個人情報の取扱いの実態と問題—教員を対象としたアンケート調査を手掛かりに—。情報ネットワーク・ローレビュー, 4(2) : 34-48
- Takashi Otani (2005) A Life Story Study of Technology Specialist Teachers in Japan: Latent Significance of Lack of Human Content in Educational Media and Technologies, in Piet Kommers & Griff Richards eds. (2005) Proceedings of ED-MEIA 2005. *World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia & Telecommunications, Association for the Advancement of Computing in Education*, 100-100 (論文は全6ページ。ProceedingsはCD-ROM収蔵)
- Takashi Otani (2005) Reflecting on Japanese Universities' Global Citizenship Education and Traditional Values, Virginia Stead (2005) *Proceedings: International Education Dynamics – Their Influence and Dynamics within the Canadian Academy*. <http://www.csse.ca/CCSE/Conference.htm>
- 大谷 尚 (2005) 質的アプローチは研究に何をもたらすか。質的心理学研究, 4 : 17-28
- 大谷 尚 (2004) 人間のコミュニケーションの構造とメディア—人間的なコミュニケーションへの回帰をめざし

## 大谷 尚教授 略歴・研究業績

て一、学習情報研究（（財）学習ソフトウェア情報研究センター）、15-18

- 直井一博・大谷 尚（2003）第二言語学習のエスノグラフィの理論的枠組み—英語合宿における英語学習を一事例として—、日本教育工学会論文誌、27（3）：247-258
- 中田有紀・羽谷沙織・西野節男・大谷 尚（2003）大学の講義を通じた受講者の意識変容と概念形成に関する考察—フィールドワークの経験を伝える『教育人類学講義』の受講者に対する調査、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）、50（1）：179-190
- 村上 隆・吉田俊和・的場正美・柴田好章 他16名（2003）サマー・スクールの実施による高大接続の改善に関する基礎的開発研究、名古屋大学大学院教育発達科学研究科中等教育研究センター紀要、3（2）：1-4
- 大谷 尚（2003）トロント大学附属学校、名古屋大学大学院教育発達科学研究科中等教育研究センター紀要、3（1）：1-3
- 大谷 尚（2003）インターネットの中の人権、愛知学院大学情報社会政策研究、5（2）：83-97
- 大谷 尚（2002）第2章 教育システム（組織）の新しいパラダイム—フリースクールやホームス쿨から日本の学校を考える—『ネットワーク社会における教育の実践知の形成と結合による現職教育に関する研究—ポストモダンの視点から—』平成12年度-13年度 科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書、研究代表者 仏教大学 西之園晴夫、24-40
- 大谷 尚（2001）「第3章 情報化教育法の内容と大学での授業方法 第4節 シラバスの収集と内容の分析」『高校普通科『情報』のための教員養成カリキュラムと教員免許の履修形態に関する研究』平成12年度科学研究費補助金基盤研究（C）（1）研究成果報告書（研究課題番号12898008）研究代表者 電気通信大学 岡本敏雄、82-84
- 大谷 尚（2001）「第3章 情報化教育法の内容と大学での授業方法 第3節 各授業案の比較と検討による特教化」『高校普通科『情報』のための教員養成カリキュラムと教員免許の履修形態に関する研究』平成12年度科学研究費補助金基盤研究（C）（1）研究成果報告書（研究課題番号12898008）研究代表者 電気通信大学 岡本敏雄、74-81
- 大谷 尚（2001）「第4章 教育工学における哲学的基礎 第1節 本グループの課題とその検討」『Post Modern Ageにおける教育工学研究の体系化に関する総合的研究』平成12年度-13年度 科学研究費補助金基盤研究（B）（1）中間報告書（研究課題番号12480038）研究代表者 電気通信大学 岡本敏雄、51-52
- 大谷 尚（2001）情報化時代の教育に何が求められているか、名古屋大学大学院教育発達科学研究科中等教育研究センター紀要、1：7-22
- 大谷 尚（2000）あるフリースクールの学校文化の検討—サドベリーバレー・スクールでの観察と面接にもとづく分析—、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）、42（2）：11-27
- 大谷 尚（2000）教育実践研究における『研究仮説』を考える、IMETS（財団法人才能開発教育研究財団）、136（4）：62-65
- 大谷 尚（2000）SCSによる連続講義を取り入れた大学授業の開発と評価、平成11年度研究調査助成報告書（財団法人松下視聴覚教育研究財団）、37-50
- 大谷 尚（2000）サドベリーバレー・スクールを訪問して、中部開発センター、2000-9、78-96
- 大谷 尚（1999）国際化・情報化に対応した教育政策の転換と学校教育の展開—学習指導要領への国際化・情報化教育政策の反映—、先進工業国における現代都市社会の諸問題 報告書、社団法人中部開発センター、29-42
- 大谷 尚（1999）「質的研究」の文脈からみた日本の授業研究の位置づけに関する試論—研究成果の交流と共有を展望して—、教育方法学研究、24：29-37
- 大谷 尚（1998）インターネットの教育利用における予期しなかった結果に関する一考察—教育関係者のメーリングリストへの海外からの不適切な要求のメールの事例をとおして—、名古屋大学教育学部紀要—教育学—、45（1）：99-112
- 大谷 尚（1997）現代社会の中の学校—現代都市社会の中の学校と若者の都市行動を考えるてがかりとして—、先進工業国における現代都市社会の諸問題 報告書、社団法人中部開発センター、47-64
- 大谷 尚（1997）子どもの成長とコンピュータ、子とともに、22-27

- 大谷 尚 (1997) 情報ネットワークと大学 —ネットワーク社会における行動と新たな知のあり方を考える。大学と教育。18-28
- 大谷 尚 (1997) インターネットは学校教育にとってトロイの木馬か —テクノロジーの教育利用と学校文化—。学習評価研究。29: 42-49
- 大谷 尚 (1996) コンピュータは教室に何をもたらすか —コンピュータを用いた授業を対象とした観察研究と分析の必要性—。日本教育方法学会編。戦後50年、いま学校を問い直す (教育方法25。日本教育方法学会編。明治図書。129-139
- 大谷 尚 (1996) コンピュータが小学校や中学校にもたらすもの。名古屋大学情報処理教育センター広報。4-9
- 大谷 尚 (1996) コンピュータが教室にもたらすもの。教育と医学。500: 64-69
- 大谷 尚 (1995) 学校教育におけるコンピュータ利用を対象とした質的研究のためのコードワードの機能と特性の検討。名古屋大学教育学部紀要 —教育学科—。42(1): 109-128
- 大谷 尚・柴田好章 (1995) 名古屋大学教育学部と附属学校におけるインターネット利用の試み —学部、大学院、附属中・高等学校のための情報環境の整備・充実とその運用について—。名古屋大学教育学部紀要 —教育学科—。42(1): 213-227
- 大谷 尚 (1995) コンピュータを用いた授業を対象とする質的研究の試み。日本教育工学雑誌。18(3/4): 189-197
- 大谷 尚 (1995) 米国の留学・高等教育情報システムの現状 —カレッジ・ボードを中心に—。留学交流。7(7): 6-9
- 大谷 尚 (1994) 番組制作における情報の構成方法・伝達方法の大学授業との差異について。平成5年度放送利用の大学公開講座テーマ研究報告書。1-20
- 大谷 尚 (1993) 主体的学習のためのパソコンの利用。NEW 教育とマイコン (学習研究社)。1993.1。38-41
- 大谷 尚 監訳 (1993) アンドリュウ・エフラット著「カナダの中等教育の特質と問題」。中等教育研究。第4号特集「中等教育改革の課題: 世界と日本」。53-66
- 大谷 尚 (1993) 日本の教育／カナダの教育 —カナダの学校生活と帰国子女問題—。オーロラ (カナダ国内誌)。5: 10-12
- 大谷 尚 (1993) 日本の教育／カナダの教育 —カナダの教育についてのいくつかの補足—。オーロラ (カナダ国内誌)。4: 12-14
- 大谷 尚 (1993) 日本とカナダの教育改革その2 —カナダの教育問題とその改革の動き—。オーロラ (カナダ国内誌)。3: 12-14
- 大谷 尚 (1993) 日本とカナダの教育改革その1 —日本の学校教育の改革の動き—。オーロラ (カナダ国内誌)。2: 10-12
- 大谷 尚 (1993) カナダの教育のこれまでとこれから。オーロラ (カナダ国内誌)。1: 8-10
- 大谷 尚・河合優年・鋤柄増根 (1992) 学校間国際パソコン通信の中・高等学校における教育利用の効果と影響に関する評価研究。電気通信普及財団研究調査報告書。6: 152-160
- 大谷 尚 (1991) 大学生のレポートにあらわれたコンピュータの教育利用に関する先入観の分析。名古屋大学教育学部紀要 —教育学科—。37: 65-77
- 安彦忠彦・的場正美・浅沼 茂・大谷 尚・川嶋太津夫 (1991) 授業方法の改善の視点と方向。大学の授業方法・授業形態の改善と充実 —教育研究学内特別経費報告書—。75-94
- 的場正美・大谷 尚・川嶋太津夫 (1991) 本学部における授業方法の事例分析。大学の授業方法・授業形態の改善と充実 —教育研究学内特別経費報告書—。33-58
- 大谷 尚 (1991) 中・高等学校におけるコンピュータの教育利用と教育課程の情報化。中等教育研究第1号特集「中高等学校における教育の情報化」。11-50
- 大谷 尚 (1990) モーショントラックの活用。NEW 教育とマイコン (学習研究社)。110-113
- 大谷 尚 (1989) 授業研究の一手法としての逐語記録に対する計量的な分析について。名古屋大学教育学部紀要 —教育学科—。36: 327-338
- 大谷 尚 (1989) 情報化社会と教育実践への取り組み —教育実践を変える契機としてのコンピューター—。豊田

市教育研究所だより, 260

- 大谷 尚 (1988) BASIC プログラミング教育におけるひとつの試み —熟考し確信をもってからそれをコンピュータで確認するプログラミングの学習方法とそのため教材 (テキスト) の開発—. 長崎大学教育学部大学教育方法等改善研究プロジェクト報告書, 70-99
- 大谷 尚 (1988) 教員養成大学・学部における教育実践・教育工学センターの教育実習への関わりに関する調査. 長崎大学教育学部大学教育方法等改善研究プロジェクト報告書, 102-123
- 大谷 尚・八田昭平(1987)コンピュータを用いた授業(逐語)記録の分析手法の研究. 日本教育工学雑誌, 11(2/3): 117-131
- 大谷 尚 (1987) 授業分析におけるコンピュータの利用. 遙 (ぎょうせい), 1987-6, 80-81
- 大谷 尚 (1987) コンピュータ導入に失敗しないために マイコンレダー (第一法規), 1987-5, 48-49
- 山口康子・大谷 尚 (1986) 日本語の発音指導のためのビデオ教材の開発と評価 —音声のない世界を体験させることをとおして—. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 9: 113-126
- 古田庄平・大谷 尚 (1985) 音楽的聴音能力の実態調査に基づく読譜指導. 長崎大学教育学部大学教育方法等改善研究プロジェクト報告書, 116-128
- 大谷 尚 (1985) パーソナルコンピュータによる授業記録分析システムのデータ形式とデータ作成の効率化について. 長崎大学教育学部大学教育方法等改善研究プロジェクト報告書, 181-191
- 大谷 尚・松原伸一 (1984) 出現語の頻度分布にもとづく授業の特徴化について. 電子通信学会教育技術研究報告, 1984-12, 1-6
- 大谷 尚 (1984) パーソナルコンピュータを用いた読譜指導のための CMI システム —音楽的聴感覚調査とそのフィードバックシステム—. 日本教育工学雑誌, 9: 71-86
- 大谷 尚 (1984) 虚構の教材に関する一考察 —虚構の録音教材をめぐる—. 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 31: 45-55
- 大谷 尚 (1982) ワードプロセッサとパーソナルコンピュータによる日本語処理 —教育情報処理における活用のために—. 長崎大学教育学部附属教育工学センター年報, 26-36
- 大谷 尚 (1982) パーソナルコンピュータを用いた音の機能を持つ CAI システム —算数モジュール教材の開発—. 日本教育工学雑誌, 7: 87-97
- 大谷 尚 (1982) 読譜指導のための CMI システムの開発 —教育情報処理の具体的検討—. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 5: 223-238
- 菊川 健・大谷 尚 (1982) マイコンの教育利用の問題点. 科研総合(A) 教育情報処理のための言語の標準化に関する研究 昭和56年度研究成果報告書, 87-105
- 大谷 尚 (1981) 教育学術文献情報に関する研究 —ERIC を用いたビブリオグラフィックな調査—. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 3: 257-267
- 大谷 尚 (1981) 音楽の CAI システムの開発のための基礎的考察. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 3: 343-352
- 大谷 尚 (1981) 教育情報処理におけるマイコンの利用 —マイコンのファイル交換について—. 科研総合(A) 教育情報処理のための言語の標準化に関する研究 第2年次中間報告, 9-16